

延勝寺跡・岡崎遺跡

2014年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

延勝寺跡・岡崎遺跡

2014年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、住宅建設工事に伴う、延勝寺跡・岡崎遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

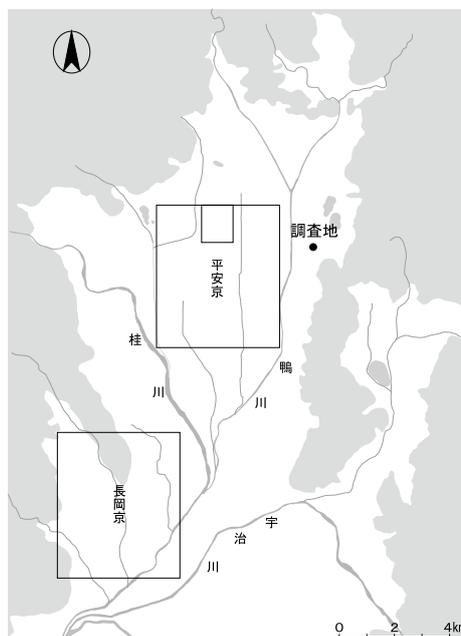
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成26年7月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 延勝寺跡・岡崎遺跡（文化財保護課番号 13 R 554）
- 2 調査所在地 京都市左京区岡崎成勝寺町3番地の2
- 3 委 託 者 (株)かねわ工務店 代表取締役 田丸政則
- 4 調査期間 2014年3月10日～2014年5月1日
- 5 調査面積 360㎡
- 6 調査担当者 近藤章子、丸山真史
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「御所」・「吉田」・「三条大橋」・「岡崎」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 近藤章子
付章：小野映介（新潟大学）・河角龍典（立命館大学）
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員および資料業務職員があたった。



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 歴史的環境と立地	3
(2) 既往の調査	3
3. 遺 構	8
(1) 基本層序	8
(2) 遺 構	8
4. 遺 物	20
(1) 遺物の概要	20
(2) 土器類	20
(3) その他の遺物	23
(4) 瓦 類	24
5. ま と め	30
付章 京都盆地東部、延勝寺跡・岡崎遺跡における遺構面下の地質	32

図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区第1面（北から）
		2	2区第1面（西から）
		3	1区東壁（北西から）
図版2	遺構	1	1区第2面（北から）
		2	2区第2面（東から）
		3	2区整地層2検出状況（西から）
図版3	遺構	1	井戸42（北から）
		2	井戸45（東から）
		3	井戸46（南西から）
図版4	遺物		出土土器
図版5	遺物		出土土器・土製品・石製品・木製品
図版6	遺物		出土瓦1
図版7	遺物		出土瓦2

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：400）	2
図3	調査前全景（東から）	2
図4	作業風景（西から）	2
図5	周辺の調査位置図（1：2,500）	4
図6	断面柱状図（1：40）	8
図7	1区西壁断面図（1：50）	9
図8	北壁断面図（1：50）	10
図9	1区南壁断面図（1：50）	11
図10	1区東壁断面図（1：50）	12
図11	第1面平面図（1：150）	13
図12	第2面平面図（1：150）	14
図13	井戸42実測図（1：40）	16
図14	井戸45実測図（1：40）	17
図15	井戸46実測図（1：40）	18
図16	土坑15・32・43断面図（1：40）	19
図17	整地層2出土弥生土器実測図（1：4）	21
図18	整地層2出土土器実測図（1：4）	22
図19	井戸46出土土器実測図（1：4）	23
図20	整地層1出土土器実測図（1：4）	23
図21	出土土製円塔実測図（1：4）	23
図22	出土石製品・木製品実測図（1：4）	23
図23	出土軒丸瓦拓影・実測図（1：4）	25
図24	出土軒平瓦拓影・実測図（1：4）	26
図25	井戸46出土軒丸瓦・軒平瓦拓影・実測図（1：4）	27
図26	井戸46出土丸瓦・平瓦拓影・実測図（1：4）	28
図27	1972・1973年度の周辺調査位置図（1：800）	30
図28	深掘りトレンチ北断面	32

表 目 次

表 1	周辺の調査一覧表	5
表 2	遺構概要表	8
表 3	遺物概要表	20
表 4	軒瓦産地別計数表	24
表 5	年代測定結果	33

付 表 目 次

付表 1	出土土器観察表	34
付表 2	出土その他の遺物観察表	36
付表 3	出土瓦観察表	37

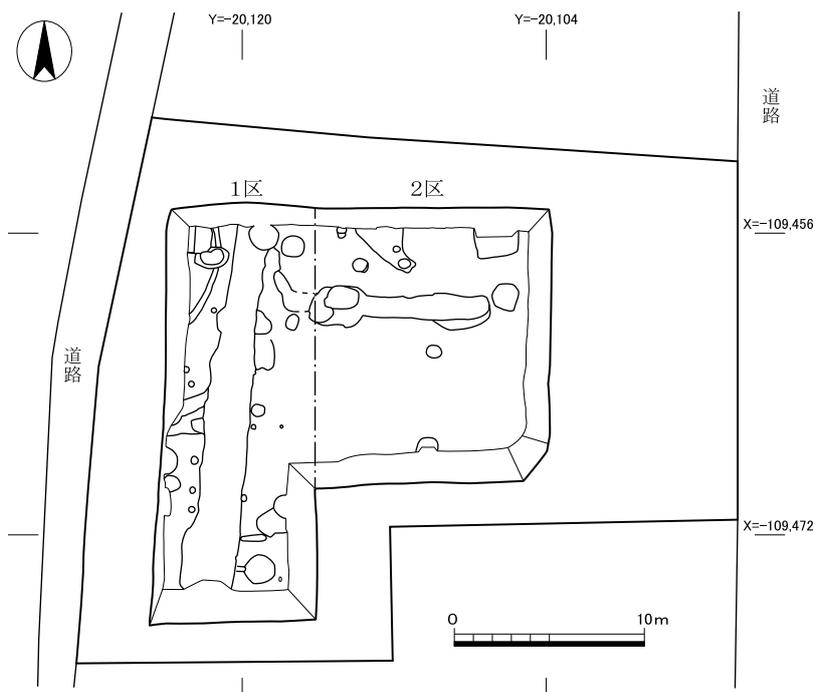


図2 調査区配置図 (1 : 400)

発掘調査に先立って文化財保護課により、敷地内において東西トレンチ、南北トレンチの2箇所を試掘調査が実施され、室町時代の遺構面、平安時代の池跡、弥生時代の遺物包含層などがみついている。また、1972年に実施された北隣接地での調査でも、池跡が見つかっており、本調査においても延勝寺の園池に関連する遺構・遺物の検出が想定された。

調査区は敷地内に残土置

き場を確保するため、東西2区に分割し、反転調査とした。調査面積は約360㎡である。

まず、2014年3月10日より現場事務所の設営、電気・水道工事などの付帯工事を行った。翌11日、西半部の1区より重機掘削を開始した。その後人力掘削に切り替えて調査を行い、遺構実測・写真撮影などによる記録作業を行って、調査終了後に埋め戻した。引き続き東半部の2区の重機掘削を行い、人力掘削による調査を行った。調査の進捗に伴い、遺構実測・写真撮影などの記録作業を行い、調査終了後は重機で埋め戻し、原状復旧した。

調査の結果、平安時代の井戸・土坑、室町時代の井戸、江戸時代の溝などを検出し、調査区全域で平安時代後期と平安時代末期から鎌倉時代初頭の2時期の整地層を検出した。



図3 調査前全景 (東から)



図4 作業風景 (西から)

2. 位置と環境

(1) 歴史的環境と立地

調査地は、平安時代後期、11世紀後半から12世紀にかけて院政の中心地となった白河の地にあたる。

白河は、北側には吉田山丘陵、東側には東山山麓があり、その間を縫って北東から流れてくる白川によって形成された扇状地と、鴨川左岸の沖積地からなる。地形は北東から南西に向かって緩やかに傾斜し、これまでの発掘調査では、その地形に沿って多数の弥生時代から古墳時代の自然流路が見つかっている。

白河は平安京と東海道、東山道を結ぶ道路に沿っており、また鴨川に近接していたことから水運の便にも恵まれていたと考えられ、交通の要衝であった。平安時代前期には、嵯峨野や宇治などと並ぶ景勝地であったことから貴族の別荘や寺社が造られ始める。平安時代中期には藤原氏の別荘が営まれた。平安時代後期には、左大臣藤原師実が藤原氏の代々の別荘であった白河殿（白河院）を白河天皇に献上し、その地に天皇の発願で法勝寺の造営が始まった。平安京左京域の市街地拡大と共に、この法勝寺の造営を機に、鴨川の東側にあたる白河に街区が形成される。白河街区は二条大路末（平安京の二条大路延長）と法勝寺を基軸として地区割りされ、その中に天皇や皇后の御願寺や院御所が造られた。御願寺は六寺いずれも「勝」の字を寺名に付したことから、総称して「六勝寺」と呼ばれた。法勝寺の造営は承保二年（1075）に始まり、その後には堀河天皇による尊勝寺、鳥羽天皇による最勝寺、鳥羽天皇皇后待賢門院璋子による円勝寺、崇徳天皇による成勝寺と続き、そして久安五年（1149）に近衛天皇による延勝寺が造営された。白河街区は院政期の繁栄と共に拡大したが、平氏などの武士の台頭により院政が衰退すると、その機能は次第に失われた。その中で法勝寺などの寺院は存続していたが、応仁元年（1467）に始まった応仁・文明の乱によって焼亡し廃絶した。その後、岡崎一帯は明治まで畑地や水田として利用される¹⁾。

明治になると、東京遷都により京都全体が衰退するなか、京都の近代化事業の一環として明治23年（1890）に岡崎を中心とした琵琶湖疏水が計画される。さらに明治28年（1895）には平安遷都1100年記念祭として平安神宮が創建され、内国勸業博覧会会場地となる。その後博覧会跡地は岡崎公園となり、動物園、美術館、図書館、勸業館、京都会館などが配置され、現在は京都屈指の文化ゾーンとなっている。岡崎一帯には、六勝寺の各寺院の名前が町名として現在でも残されている。

(2) 既往の調査

本調査地の延勝寺跡、近接する尊勝寺跡、得長寿院跡を中心とした周辺地域の主要な既往調査を図5、表1に示した。

調査地一帯は、弥生時代から古墳時代の集落遺跡である岡崎遺跡にあたっており、弥生時代の方形周溝墓（調査6・12・13・22・23）、弥生時代から古墳時代の溝・流路（調査14・16・24・26・

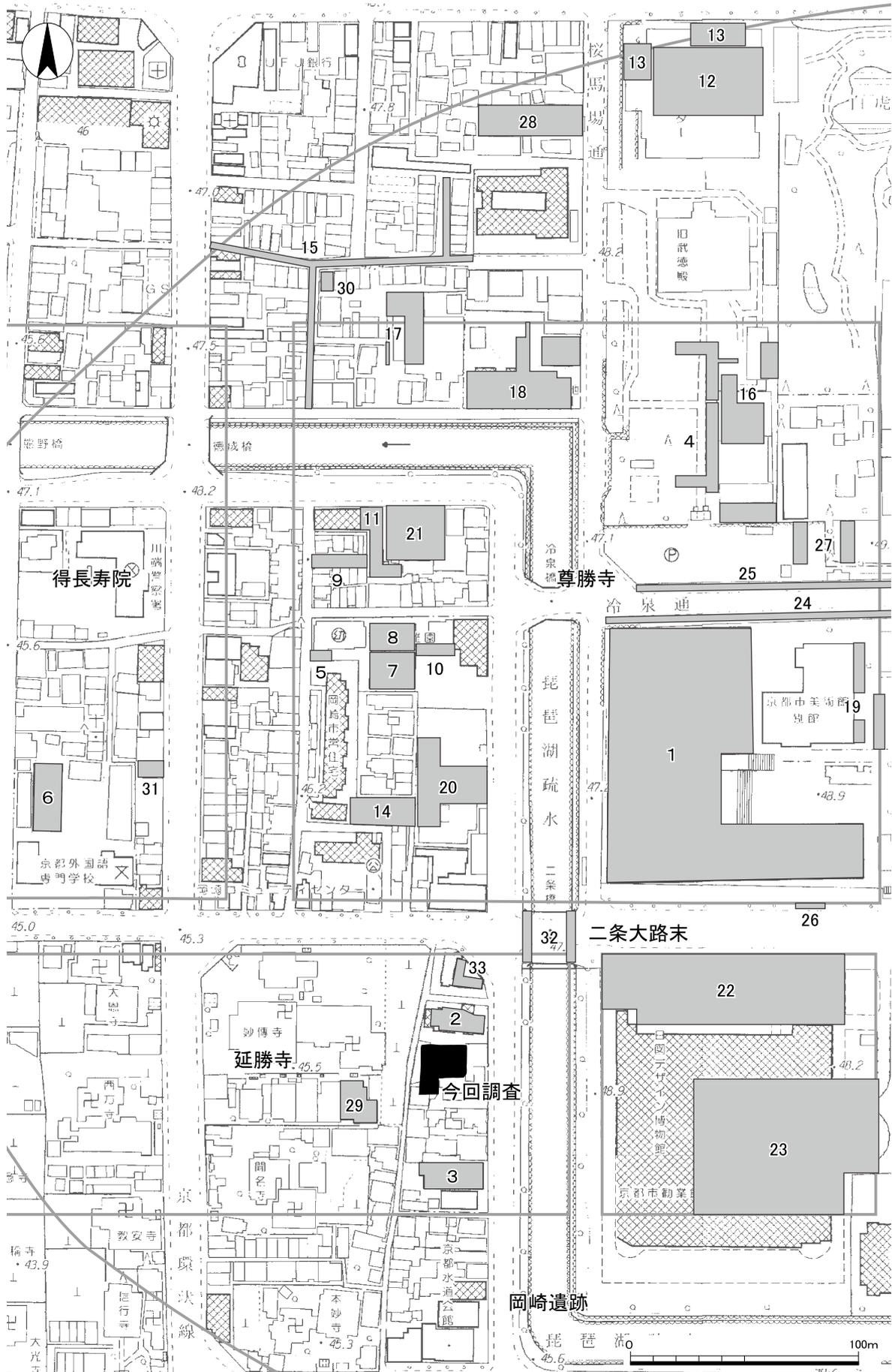


図5 周辺の調査位置図 (1 : 2,500)

表1 周辺の調査一覧表

No.	遺跡名	調査方法	調査年度	調査概要	調査機関	文献番号
1	尊勝寺跡	発掘	1959	建物・溝・井戸など。平安後期の瓦多量・土製円塔・磁器・瓦器・土師器・種子類、平安以前の石器・須恵器など。	奈良国立文化財研究所	1
2	延勝寺跡	発掘	1972	延勝寺関連の池汀、瓦溜など。近世の南北溝。	六勝寺研究会	2
3	延勝寺跡	発掘	1973	中世の井戸、延勝寺関連の建物地業、庭園遺構など。	六勝寺研究会	3
4	尊勝寺跡	発掘	1973	建物、瓦溜など。瓦類など。	六勝寺研究会	4
5	尊勝寺跡	発掘	1976	南北方向の雨落溝。	京都市文化財保護課	5
6	得長寿院跡	発掘	1977	弥生の方形周溝墓4基。平安後期～鎌倉の東西溝2条、配石1箇所、土坑12基、井戸2基。	京都市埋文研	6
7	尊勝寺跡	発掘	1977	平安後期の建物跡(根石8個)、版築層。	京都市埋文研	7
8	尊勝寺跡	発掘	1978	平安後期の基壇、礎石据付跡22基。近世の瓦溜1基、集石土坑3基、井戸1基。	京都市埋文研	8
9	尊勝寺跡	発掘	1978	平安の礎石据付跡2基(建物基壇に伴うもの)、南北溝2条、溝2条(築地側溝)。近世の土坑8基、溝1条。	京都市埋文研	8
10	尊勝寺跡	発掘	1980	平安の礎石据付穴1基(建物遺構)、溝1条。	京都市埋文研	9
11	尊勝寺跡	発掘	1980	平安の礎石据付跡8基、土坑1基、石敷遺構1箇所、石列2条、建物の版築層。	京都市埋文研	9
12	歓喜光院跡(推定地)	発掘	1982	弥生中期の方形周溝墓2基以上。平安中期の土坑1基。平安後期の井戸7基、溝3条、土坑・柱穴多数。鎌倉～室町の土坑(土壇墓?4基)、柱穴多数。	京都市埋文研	10
13	歓喜光院跡(推定地)	発掘	1982	弥生中期の方形周溝墓2基(12の続き)。平安中期の柱穴2基。平安後期の溝(東西溝1条、南北溝2条)。鎌倉前半の井戸、柱穴多数。室町の火葬墓1基(人骨を伴う?)、土壇墓1基。	京都市埋文研	11
14	尊勝寺跡	発掘	1984	平安後期の地業跡①広く全体を版築、②大型の川原石と粘土で版築(建物跡)塔跡の基壇?、溝跡(幅不明、弥生～古墳の遺物あり)。近代のピット群(柵列跡)東西方向。	京都市埋文研	12
15	尊勝寺跡	立会	1985	平安後期の瓦を多量に含む遺物包含層。	京都市埋文研	13
16	尊勝寺跡	発掘	1986	弥生～古墳の溝。平安後期の東西溝、建物跡。中世の窯跡3基、瓦溜。	京都市埋文研	14
17	尊勝寺跡	発掘	1987	平安後期以前の溝。平安後期の溝、建物跡(南北棟礎石建物)、柵列。鎌倉～室町の溝、土坑、井戸。	京都市埋文研	15
18	尊勝寺跡	発掘	1987	平安の建物・瓦溜・土坑など。大量の瓦類・少量の土器類。	京都府埋文センター	16
19	尊勝寺跡	試掘	1988	弥生～古墳の遺物包含層。平安後期の整地層、柱穴。中世～近世のピット、溝、瓦溜。	京都市埋文研	17
20	尊勝寺跡	発掘	1989	弥生～古墳の落込。平安の整地層、瓦溜5基、土坑、柱穴。中世～近世の土坑、柱穴、溝。	京都市埋文研	18
21	尊勝寺跡	発掘	1989	平安の建物跡1棟(礎石据付跡7基・雨落石敷1箇所)。中世～現代の土坑、井戸多数。	京都市埋文研	19
22	成勝寺跡(推定地)	発掘	1992	弥生後期の方形周溝墓7基。古墳後期の竪穴建物2棟。平安後期の方形縦板組井戸12基、東西溝1条、東西堀1条、方形井戸2基、方形瓦積井戸1基、土器溜土坑1基、南北溝2条、南北柵列1列。室町中期の栗田焼関係土坑1基。江戸後期の建物、柵列、井戸。	京都市埋文研	20
23	成勝寺跡(推定地)	発掘	1992	弥生後期の方形周溝墓2基。平安の自然流路。平安後期の南北溝、南北方向段差、整地土、土器溜。中世のピット(礎石)。近世～近代の耕作溝、井戸、掘立柱建物。	京都市埋文研	20
24	尊勝寺跡	発掘立会	1995	古墳の流路。平安後期の南北溝、瓦溜、土坑、基壇、石組雨落溝、礎石据付痕跡、落込。江戸の南北溝、土坑、柱穴。時期不明の南北溝、段差、土坑。平安後期の最勝寺西限築地、最勝寺と尊勝寺間の道路の路面、西側溝、尊勝寺内建物基壇・雨落溝、瓦溜、整地層、土坑。	京都市埋文研	21
25	尊勝寺跡	発掘立会	1996	平安後期の瓦溜、石組雨落溝。時期不明の落込、土坑状遺構。	京都市埋文研	22
26	二条大路末	試掘	1997	弥生後期の遺物包含層(流路)。平安後期の路面状遺構、土坑。中世・近世の遺物包含層。	京都市埋文研	23
27	尊勝寺跡	発掘	2012	平安後期の尊勝寺造営時の整地層。平安中期の遺物包含層。	京都市埋文研	未報告
28	歓喜光院跡(推定地)	発掘	2012	弥生の方形周溝墓、平安末期の版築土層の整地層。	株式会社イビソク	24

No.	遺跡名	調査方法	調査年度	調査概要	調査機関	文献番号
29	延勝寺跡	試掘	1989	地表下1.0m以下で平安末～鎌倉の集石遺構。池を埋めた状況。	京都市埋文研	25
30	尊勝寺跡	立会	1996	地表下0.9mで路面と南側溝。大炊御門大路末に位置する。	京都市埋文研	26
31	得長寿院跡	立会	1996	地表下0.97mで平安後期の遺物包含層、土坑2基。	京都市埋文研	27
32	二条大路末	立会	1997	弥生の流路。平安～鎌倉の土坑。	京都市埋文研	28
33	延勝寺跡	立会	2009	地表下1.5mで平安末期～鎌倉の遺物包含層。	京都市埋文研	29

※ 調査機関については、以下のように略記した。

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター：京都府埋文センター 財団法人京都府埋蔵文化財研究所：京都市埋文研

32)、古墳時代の竪穴建物（調査22）などが見つかっている。

六勝寺跡での本格的な発掘調査が実施されたのは、1959年の京都会館建設に伴った調査である（調査1）。その調査では、尊勝寺建物、雨落ち溝などの遺構を確認し、大量の瓦が出土した。その後も尊勝寺跡の調査では、伽藍配置を復元する遺構や寺域に関する遺構が見つかり、六勝寺の中では最も内容が解明された寺院である（調査5・7・8・10・11・14・20・21・24・25）。また二条大路末、大炊御門大路末などの路面、側溝などが検出されている（調査26・30）。白河街区全体の構造を考える上での手掛かりともなっている。

これに対して本調査が対象とした延勝寺跡の調査例は少なく、その中で延勝寺に関連すると考えられる調査成果を得たのは、発掘調査2件（調査2・3）、試掘調査1件（調査29）、立会調査1件（調査33）である。調査2では平安時代後期の瓦、土師器皿、人頭大の石を多数含む瓦溜りを検出している。これは池跡を埋めた整地と推測され、池汀を検出したとされている。調査3では建物地業、景石、庭園遺構と思われる敷石遺構が見つかっている。いずれも延勝寺関連の遺構と思われるが、建物や寺域を復元できるまでには至っていない。調査29では、多量の石で整地した平安時代末期から鎌倉時代と考えられる池跡が見つかっている。調査33では平安時代末期から鎌倉時代の遺物包含層を検出している。

文献（表1 周辺の調査一覧表 の文献番号に一致する）

- 1 「尊勝寺跡発掘調査報告」『奈良国立文化財研究所学報第十冊 平城京跡第一次伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告』 奈良国立文化財研究所 1961年
- 2 『延勝寺跡の発掘調査』 六勝寺研究会 1972年
- 3 『延勝寺跡』 六勝寺研究会 1973年
- 4 『尊勝寺跡発掘調査概報』 六勝寺研究会 1973年
- 5 『六勝寺跡』京都市埋蔵文化財年次報告 1976-II 京都市文化観光局文化財保護課 1977年
- 6 「得長寿院跡」『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都府埋蔵文化財研究所 2011年
- 7 『六勝寺跡発掘調査概報 1977』 財団法人京都府埋蔵文化財研究所 1978年
- 8 『六勝寺跡発掘調査概要 1978』 京都市文化観光局 1979年
- 9 『六勝寺跡発掘調査概要 昭和55年度』 京都市埋蔵文化財調査センター 1981年

- 10 「尊勝寺跡」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 11 「尊勝寺跡」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985年
- 12 「尊勝寺跡」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 13 「白河街区2」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1988年
- 14 「尊勝寺跡」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 15 「尊勝寺跡」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 16 『京都府遺跡調査概報 第23冊』 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年
- 17 「尊勝寺跡・岡崎遺跡」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
1993年
- 18 「尊勝寺跡・岡崎遺跡1」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究
所 1994年
- 19 「尊勝寺跡・岡崎遺跡2」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究
所 1994年
- 20 「成勝寺跡」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 21 「六勝寺跡・岡崎遺跡」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
1997年
- 22 「尊勝寺跡・最勝寺跡2」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究
所 1998年
- 23 「六勝寺跡」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 24 『白河街区跡・岡崎遺跡 -集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』 イビソク京都市内遺跡
調査報告 第5輯 株式会社イビソク 2013年
- 25 89KS17『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』 京都市文化観光局 1990年
- 26 「歓喜光院(96KS111・130)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』 京都市文化市民局 1997年
- 27 96KS516『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』 京都市文化市民局 1998年
- 28 「岡崎遺跡・延勝寺跡(97KS82)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』 京都市文化市民局
1999年
- 29 09KS147『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成21年度』 京都市文化市民局 2010年

3. 遺 構

(1) 基本層序

調査区は、南北西端22m、東端15m、東西南端8.5m、北端20mの「L」字形である。調査地は現代盛土によって平坦に整地されており、地表面の標高は46.25m前後である。

基本層序は、地表下0.7mまで盛土および近・現代層、その下には江戸時代の耕作土層（厚さ0.4m）が堆積する。その下、地表下1.1mで室町時代の耕作土、地表下1.45m・1.9mで平安時代後期・末期の整地層を検出した。整地層は上下2層に分けられ、整地層1の上面を第1面、整地層2の上面を第2面とした。整地層1上面の標高は44.7mである。整地層2下層直下で自然堆積層（基盤層）となる。基盤層上面の標高は43.9mである。

1区南部、2区北東部で基盤層の堆積状況確認のため部分的に断割りを行い、断面観察をした。その結果、1区南部では標高44.1m以下は植物遺体を含むシルト層と細砂層の互層となり、西から東へ下がる。2区北東部では標高44.0mで植物遺体を含む粗砂層、標高43.7mで火山灰層（8層、厚さ0.1m、ATか）を検出した。なお、粗砂層（7層）に含まれていた木片の年代測定の結果、弥生時代前期にあたる2200±30と2450±30BPの数値を得た（付章参照）。

(2) 遺 構

第1面とした整地層1上面で検出した主な遺構は、室町時代の耕作溝、井戸、江戸時代の南北溝などである。整地層1は平安時代末期から鎌倉時代初頭の土師器皿を多数含む。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	井戸、土坑、整地層	
鎌倉時代 ～室町時代	井戸、土坑、耕作溝	
江戸時代以降	溝、井戸	

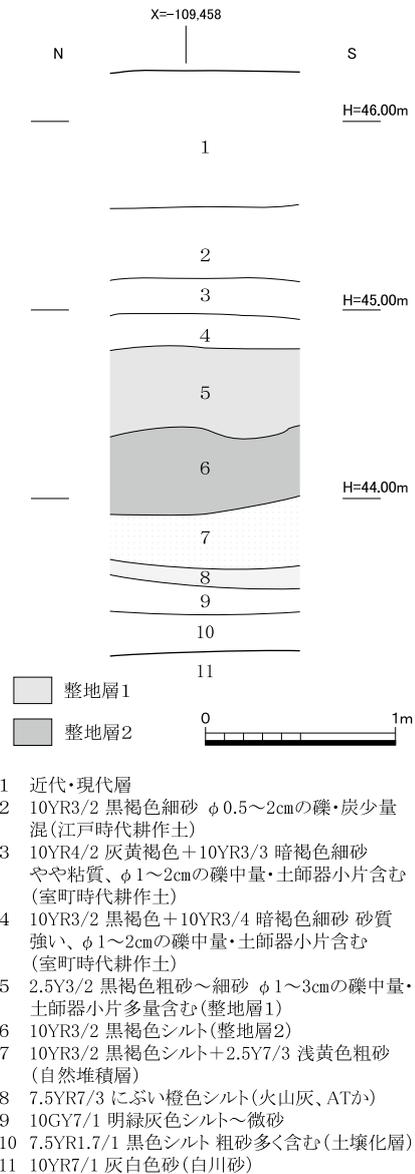


図6 断面柱状図（1：40）

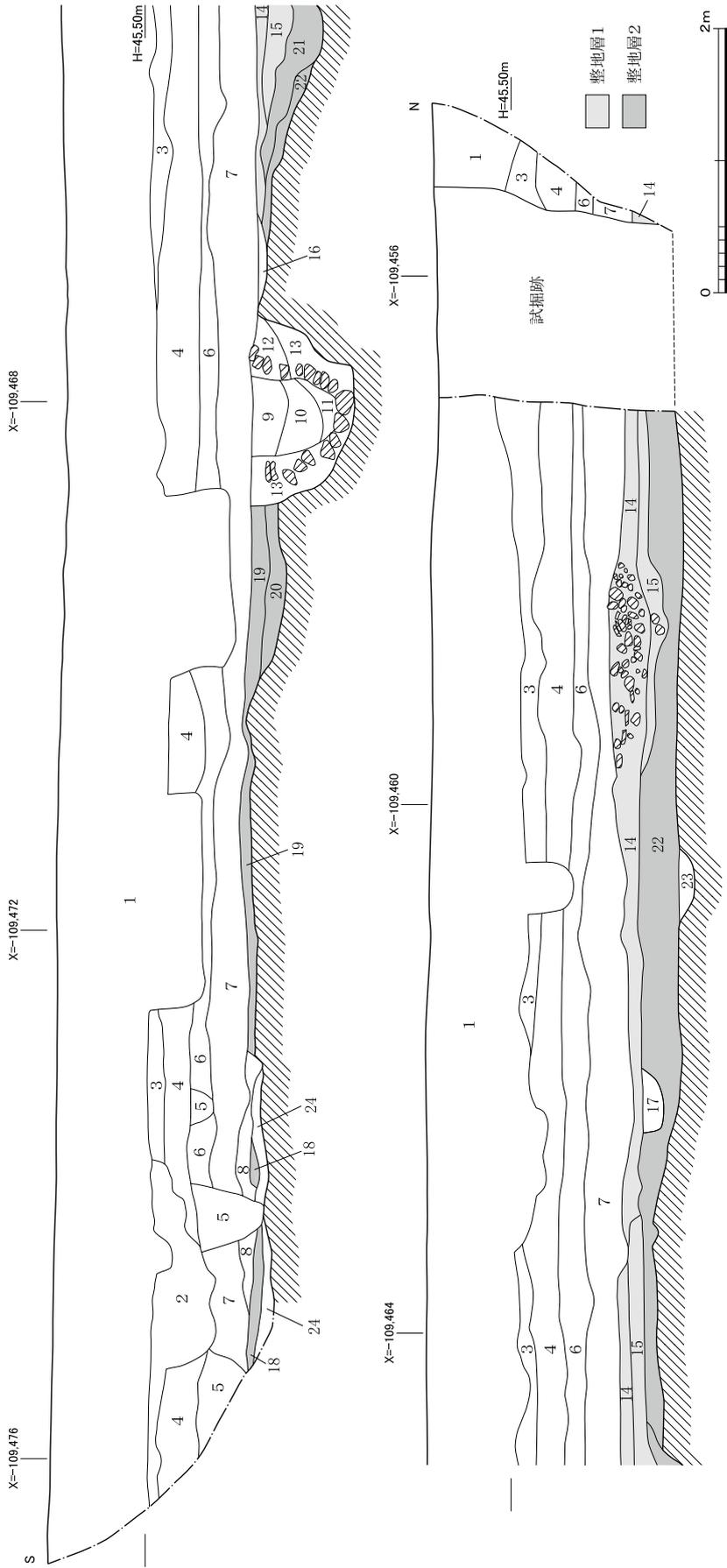


図7 1区西壁断面図 (1:50)

- | | |
|--|--|
| <p>1 盛土および近・現代層</p> <p>2 10YR3/1 黒褐色細砂 φ1~3cmの礫多量含む、縮まらず</p> <p>3 10YR3/2 黒褐色細砂 炭少量 φ0.5~2cmの礫少量含む(江戸時代耕作土)</p> <p>4 10YR4/2 灰黄褐色細砂 φ1~3cmの礫多量含む 縮まらず(江戸時代耕作土)</p> <p>5 10YR3/2 黒褐色細砂 やや粘質 φ0.5~1cmの礫・炭含む</p> <p>6 10YR4/2 灰黄褐色+10YR3/3 暗褐色細砂 やや粘質 φ1~2cmの礫中量含む 土師器小片混 (室町時代耕作土)</p> <p>7 10YR3/2 黒褐色+10YR3/4 暗褐色細砂 φ1~2cmの礫中量含む 土師器小片混 (室町時代耕作土)</p> <p>8 10YR3/3 暗褐色+10YR4/2 灰黄褐色細砂 φ3~5cmの礫多量含む</p> <p>9 2.5Y3/2 黒褐色細砂 土師器小片多量、φ0.1~0.2cmの礫少量含む</p> <p>10 2.5Y3/2 黒褐色細砂 φ0.2~0.3cmの礫多量、5Y6/2 灰オリーブ色シルトブロック含む</p> <p>11 2.5Y3/2 黒褐色細砂 やや粘質 φ0.2~0.5cmの礫多量含む</p> <p>12 2.5Y3/2 暗オリーブ色細砂~粗砂 5Y6/2 灰オリーブ色シルトブロック含む (井戸5)</p> <p>13 2.5Y3/2 黒褐色細砂~シルト 5Y6/2 灰オリーブ色シルトブロック混</p> | <p>14 2.5Y3/2 黒褐色粗砂~細砂 土師器小片多量、φ1~3cmの礫中量含む</p> <p>15 10YR3/1 黒褐色+2.5Y3/2 黒褐色細砂+シルト φ2~3cmの礫中量、土師器小片多量、炭少量含む (整地層1)</p> <p>16 2.5Y4/1 黄灰色粗砂~細砂+2.5Y4/2 暗灰黄色砂 (層6)</p> <p>17 2.5Y3/1 黒褐色細砂~粗砂 φ0.2~0.5cmの礫多量含む</p> <p>18 10YR2/2 灰黄褐色+2.5Y5/2 暗灰黄色細砂 φ1~2cmの礫中量、土師器小片、炭少量含む</p> <p>19 10YR4/2 灰黄褐色+2.5Y3/1 黒褐色細砂 やや粘質 地山ブロック(5Y6/2 灰オリーブ色シルト)少量含む</p> <p>20 2.5Y3/2 黒褐色+2.5Y3/1 黒褐色細砂 やや粘質 地山ブロック(5Y6/2 灰オリーブ色シルト)少量含む</p> <p>21 10YR2/2 黒褐色粗砂+7.5Y4/1 灰褐色極細砂ブロック φ4~5cmの礫中量、土師器小片多量、炭少量含む</p> <p>22 2.5Y2/1 黒褐色細砂 φ1~2cmの礫少量、瓦多量、土師器少量含む</p> <p>23 2.5Y2/1 黒色シルト 地山ブロック(5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト)含む</p> <p>24 10YR1.7/1 黒色シルト 粘質 弥生土器包層</p> |
|--|--|

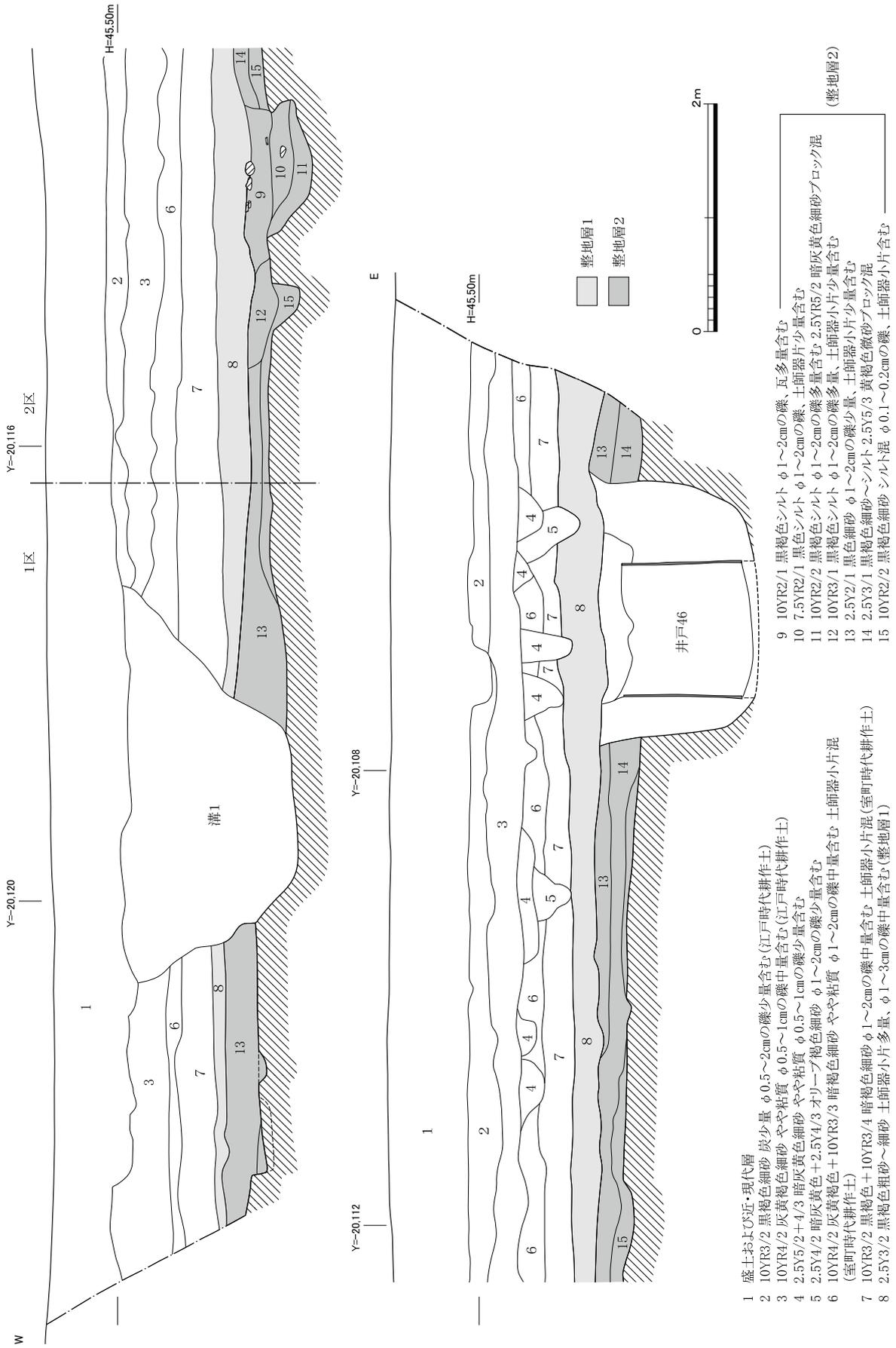
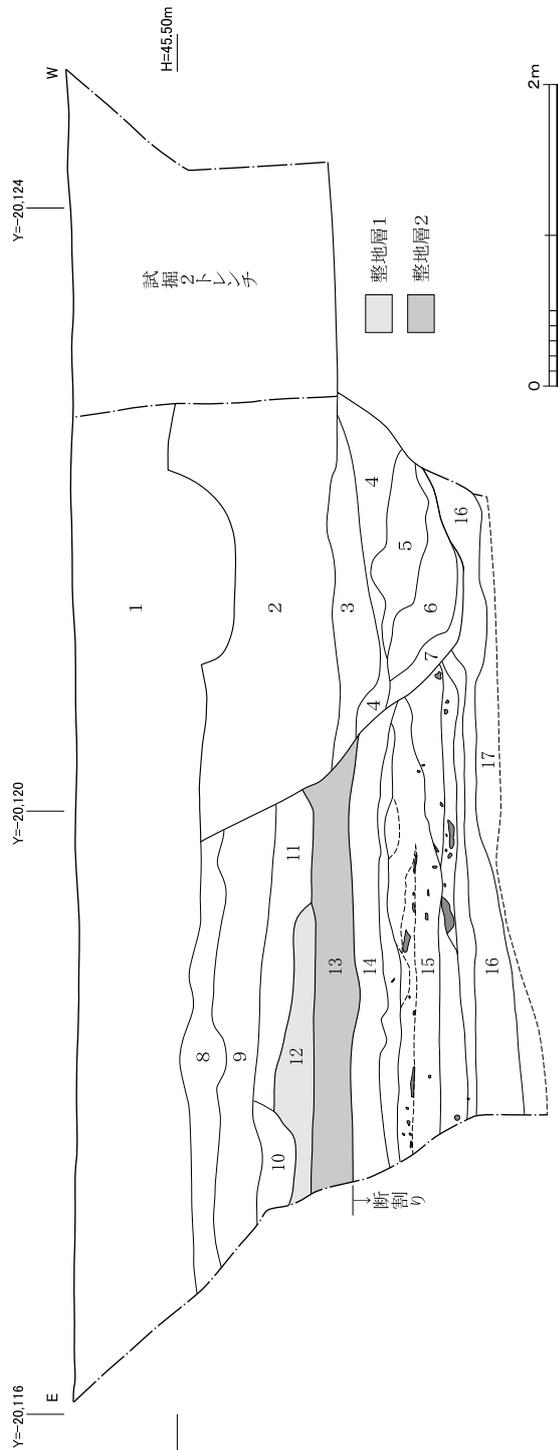
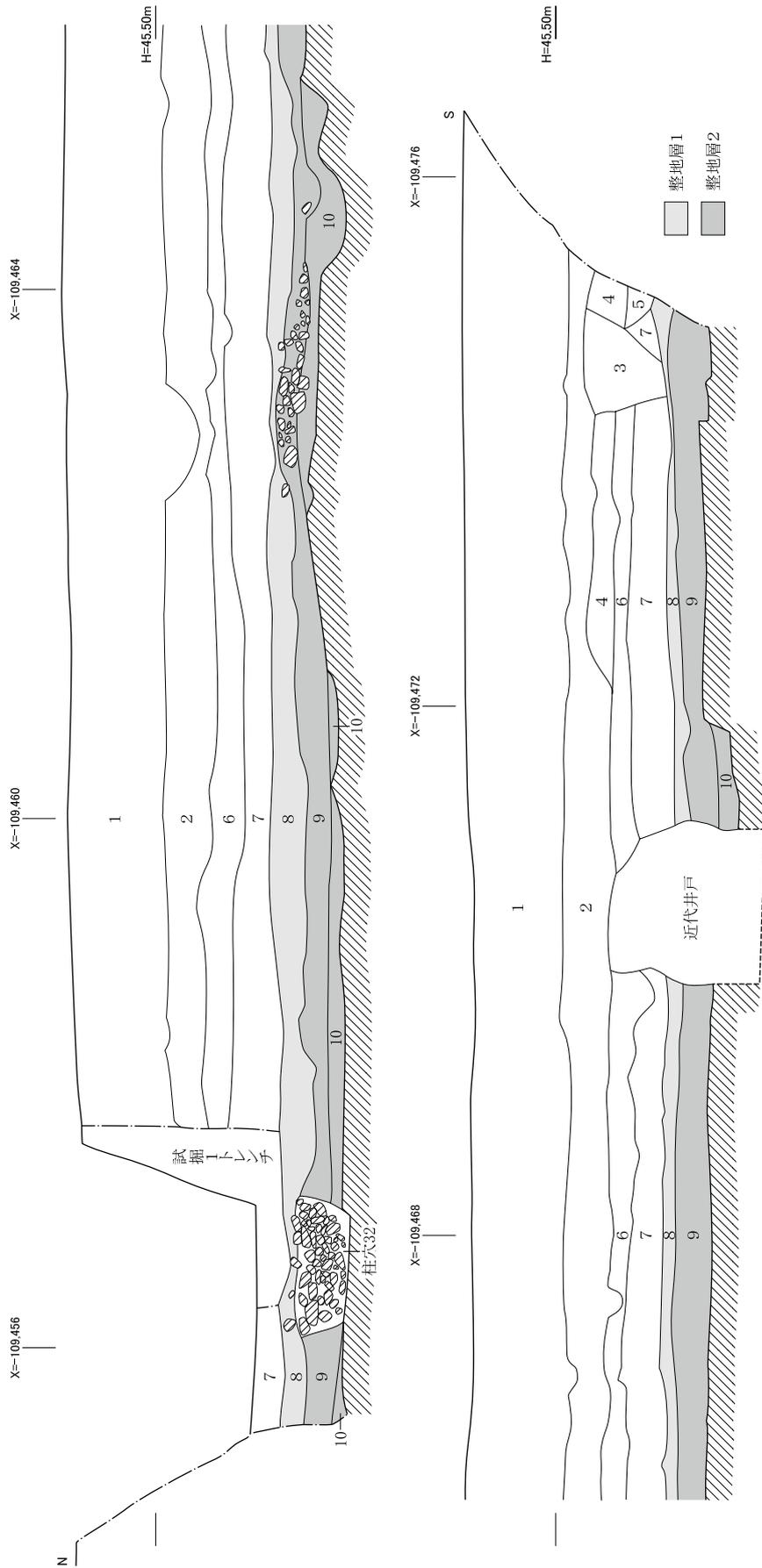


図8 北壁断面図 (1 : 50)



- | | |
|---|--|
| <p>1 盛土および近・現代層</p> <p>2 7.5Y3/1 オリーブ褐色 + 5Y3/2 オリーブ褐色 黒色細砂</p> <p>3 2.5GY3/2 黒色シルト 炭少量 φ1~2cmの礫少量、植物遺体含む</p> <p>4 2.5Y2/1 黒色細砂 ~ 粗砂 φ1~5cmの礫少量、砂ブロック含む</p> <p>5 2.5Y3/1 黒褐色極細砂 ~ シルト 下層に腐植土多く含む</p> <p>6 5Y3/2 オリーブ黒色粘土</p> <p>7 5Y3/1 オリーブ黒色 + 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂 土師器小片混</p> <p>8 10YR3/2 黒褐色細砂 炭少量、φ0.5~2cmの礫少量含む(江戸時代耕作土)</p> <p>9 10YR4/2 灰黄褐色 + 10YR3/3 暗褐色細砂 やや粘質 φ1~2cmの礫中量含む 土師器小片混(室町時代耕作土)</p> | <p>(溝1)</p> <p>10 10YR3/2 黒褐色 + 10YR3/4 暗褐色細砂 φ1~2cmの礫中量含む 土師器小片混</p> <p>11 10YR3/2 黒褐色細砂 やや粘質 φ0.5~1cmの礫・炭含む(室町時代耕作土)</p> <p>12 2.5Y4/2 暗灰黄色 + 2.5Y3/2 黒褐色細砂 ~ 粗砂 φ1~2cmの礫やや多く含む 土師器小片多く含む(整地層1)</p> <p>13 2.5Y2/1 黒色細砂 φ1~2cmの礫、土師器少量含む(整地層2)</p> <p>14 2.5Y2/1 黒色シルト ~ 粘土</p> <p>15 2.5Y3/1 黒褐色シルト + 2.5Y2/1 黒色細砂の互層 (自然堆積層)</p> <p>16 N2/0 黒色シルト</p> <p>17 10YR4/2 + 5/2 灰黄褐色砂</p> |
|---|--|

図9 1区南壁断面図 (1:50)



- 1 盛土および近・現代層
- 2 10YR3/2 黒褐色細砂 炭少量、 ϕ 0.5~2cmの礫少量含む(江戸時代耕作土)
- 3 10YR3/2 黒褐色細砂 やや粘質 ϕ 0.5~1cmの礫・炭含む
- 4 10YR4/2 灰黄褐色細砂 近世遺物混 ϕ 1~3cmの礫少量含む・結まらず
- 5 10YR3/2 黒褐色細砂 やや粘質 ϕ 0.5~1cmの礫・炭含む
- 6 10YR4/2 灰黄褐色+10YR3/3 暗褐色細砂 やや粘質 ϕ 1~2cmの礫中量含む 土師器小片混(室町時代耕作土)
- 7 10YR3/2 黒褐色粗砂~細砂 土師器小片多量、 ϕ 1~3cmの礫中量含む 土師器小片混(室町時代耕作土)
- 8 2.5Y2/1 黒色細砂 ϕ 1~2cmの礫少量、瓦多量、土師器少量含む(整地層2)
- 9 2.5Y2/1 黒色シルト~粘土 ϕ 0.1~0.2cmの礫中量、炭、土師器極小片少量含む(整地層2)
- 10 2.5Y2/1 黒色シルト~粘土 ϕ 0.1~0.2cmの礫中量、炭、土師器極小片少量含む(整地層2)

図10 1区東壁断面図(1:50)

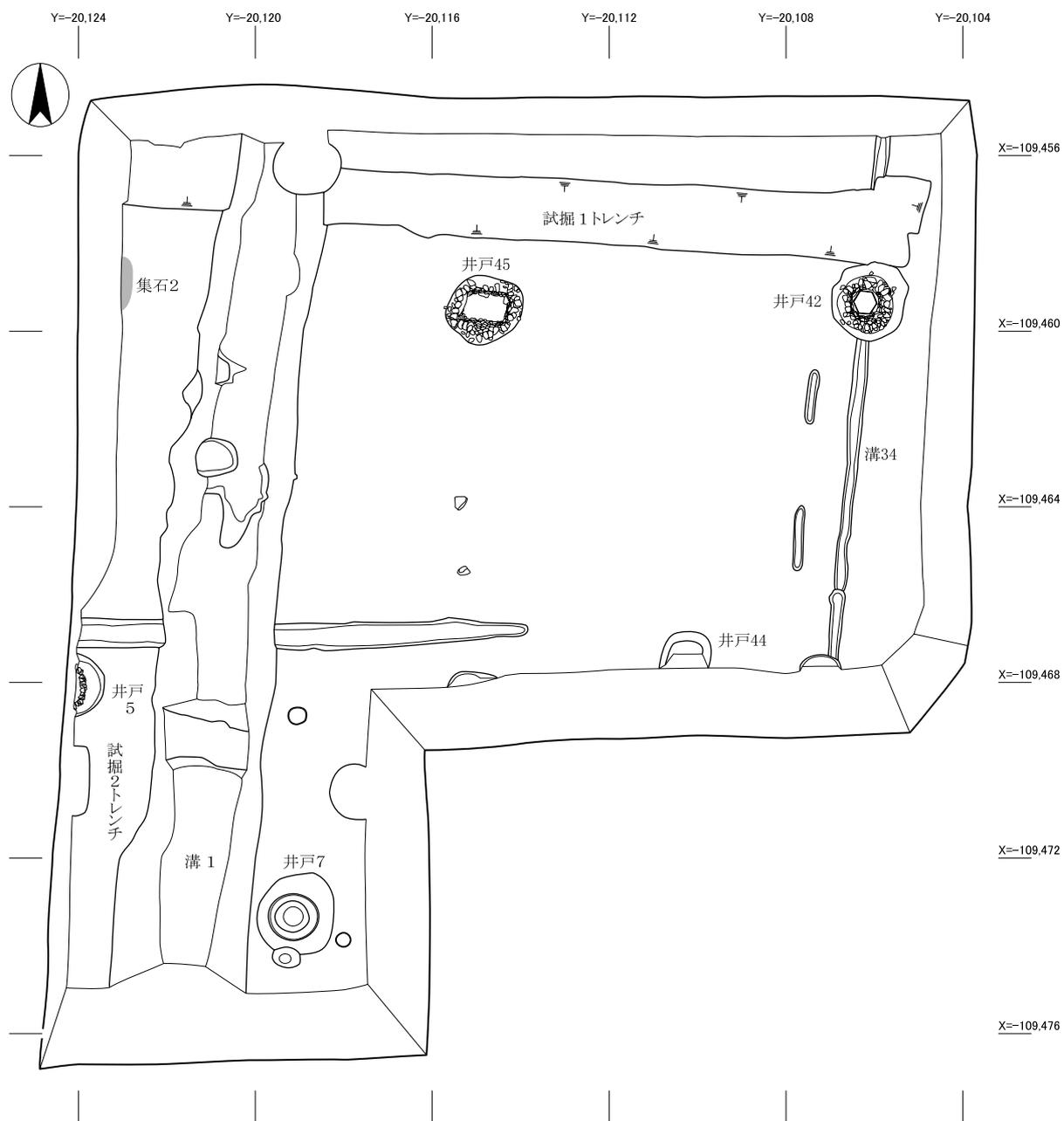


図11 第1面平面図 (1 : 150)

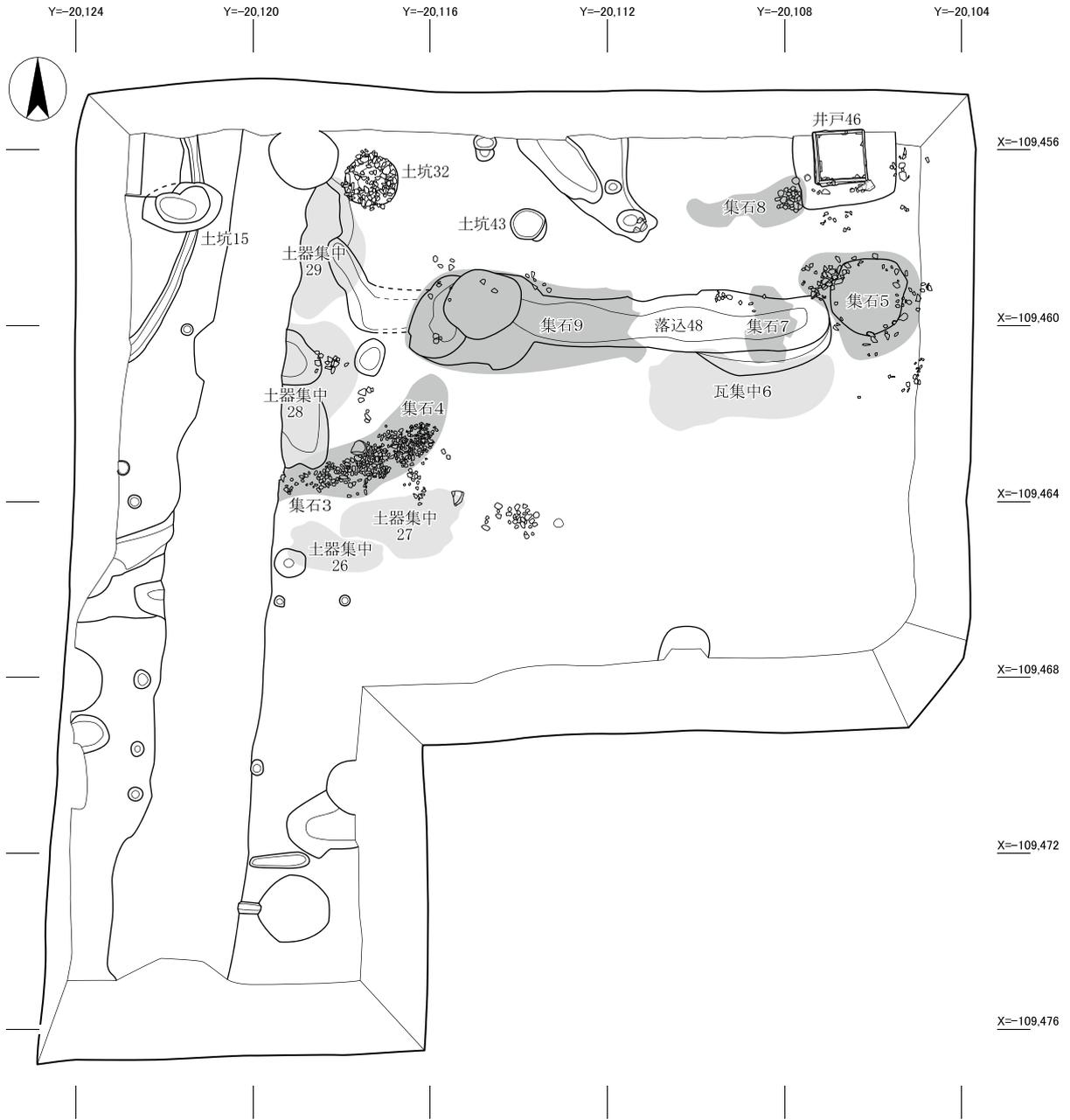


图12 第2面平面图 (1 : 150)

第2面とした整地層2上面で検出した主な遺構は、井戸、土坑などがある。整地層2には平安時代後期の土師器皿を多量に含む。

第1面の遺構（図11～14、図版1）

溝1（図9・11） 調査区西部で検出した南北方向の溝で、南北長18m以上、東西幅2.5～2.8m、検出面からの深さは0.6～0.8mである。底部の標高は北端では43.9m、南端では43.6mで北から南へ傾斜する。溝の東岸には横板と杭による護岸が施されている。溝の南部には幅約1m、高さ0.3m、溝の底部が土橋状に盛り上がる箇所がある。埋土には江戸時代から明治時代以降の遺物を含む。溝の上部は調査区北壁、南壁では、現代盛土層直下から確認できる。北隣接の調査2で南北溝の延長が検出されており、敷地西側の古川町通と平行することからこの道路の側溝と考えられている。明治以降の岡崎一帯の開発により埋められたものである。

溝34（図11） 調査区東部で検出した南北方向の耕作溝で、室町時代の耕作土層上面から切り込む。東西幅0.2～0.3m、深さ0.05～0.1mである。

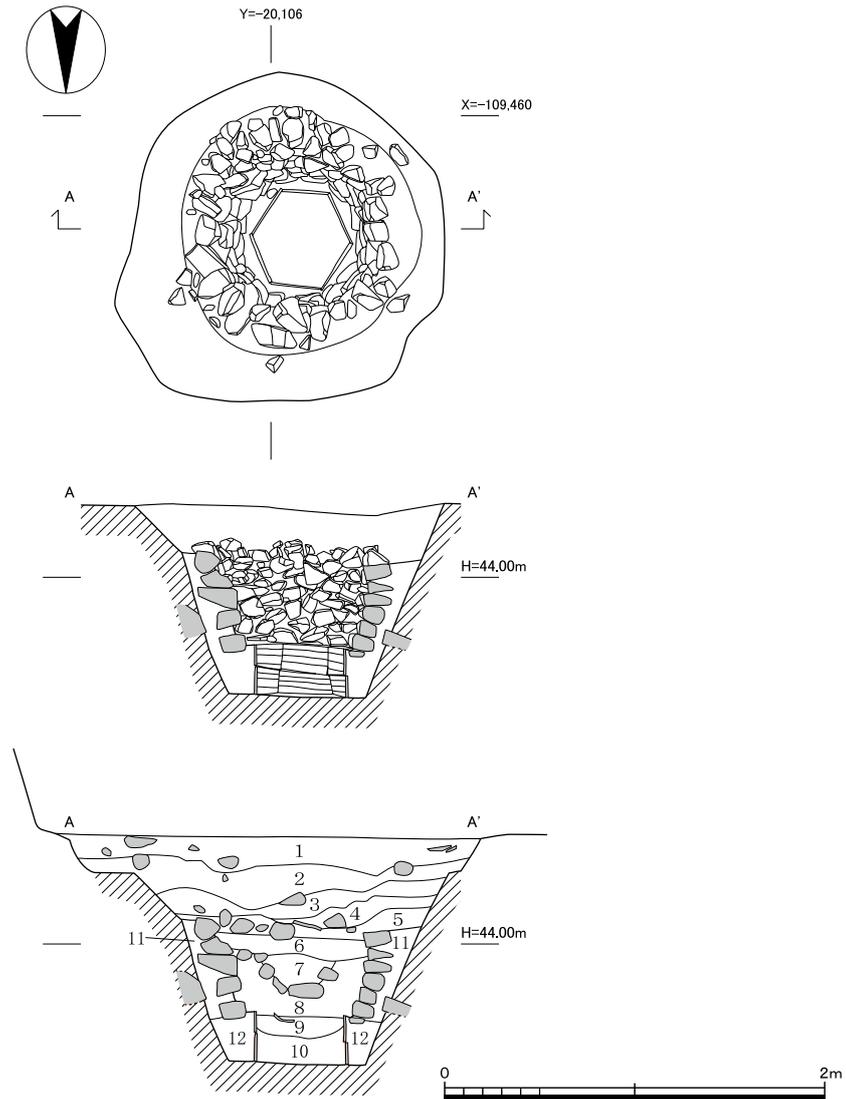
井戸5（図7・11） 調査区西部の西壁沿いで検出した。この井戸は文化財保護課による試掘調査の2トレンチで確認された井戸である。掘形は円形で南北1.4m、東西0.7m以上、井戸枠は径0.15～0.2m大の石を円形に組む。井戸枠の規模は南北内径0.6m、深さ0.8m以上である。壁際で検出したため、井戸の東半部のみ掘削に留まり完掘はしていない。

井戸7（図11） 調査区南部で検出した円形の井戸である。井戸は素掘りで径1.8m、深さ1.2m、底部の標高は43.4mである。井戸の形状は検出面から約0.6m下がった位置から底部まで窄まったロート状で、底部には木枠や曲物などが据えられていた可能性がある。埋土には平安時代後期から室町時代の遺物が含まれる。

井戸42（図13、図版3） 調査区東部で検出した円形石組みの井戸である。掘形は東西1.6m、南北1.74mで、深さは1m、底部の標高は43.36mである。底面には一辺0.28mの六角形の木枠を据える。木枠は2段重ねで、高さは1段が0.15mである。その上に径0.1～0.2m大の石を円形に積み上げる。石積みは最大で0.6m残存しており、直径は内法で下部では0.55m、上部で0.75mである。土師器、須恵器、瓦器、山茶椀、焼締陶器、輸入陶磁器などの土器類、瓦類などが出土した。土器類は小片であるが、平安時代後期から室町時代の遺物が含まれる。

井戸44（図11） 調査区南端で検出した素掘り井戸である。掘形は東西1.1m、南北0.76m以上、深さは1.1m、底部の標高は43.6mである。埋土から完形の丸瓦を含む瓦が多数出土した以外は、土師器の小片が少量出土したのみである。時期の特定はできないが、整地層1を切り込んで造られている。

井戸45（図14、図版3） 調査区北東部で検出した方形石組みの井戸である。掘形は東西1.8m、南北1.47mの楕円形で、深さは0.9m、底部の標高は43.3mである。南・東・北辺には径0.1～0.2m大の石を積み上げる。西辺は長径0.58m、短径0.48m、厚さ0.23mの花崗岩を底面から横長に据え、周囲に石を積む。石積みは最大で0.7m残存しており、内法で東西1.1m、南北0.9mで、上部は南側にやや開く。西辺に据えられた他の石に比べてひときわ大きな花崗岩には柱座を削り出した痕



- 1 10YR3/1+2.5Y3/2 黒褐色細砂、φ5~20cmの礫・1~2cmの礫中量・土師器多量含む
- 2 2.5Y3/1 黒褐色細砂 やや粘質、φ0.5~1cmの礫・土師器微片多量含む
- 3 5YR3/2 オリーブ黒色細砂~微砂、φ1~2cmの礫少量含む
- 4 5YR2/2 オリーブ黒色微砂~シルト、φ10cmの礫・瓦含む
- 5 5YR3/2 オリーブ黒色粗砂、φ10~20cmの礫含む
- 6 2.5Y3/1 黒褐色細砂~微砂、腐植物多く含む
- 7 7.5Y3/1 オリーブ黒褐色シルト~粘土
- 8 7.5Y3/1 オリーブ黒褐色シルト~粘土+7.5Y3/2 オリーブ黒褐色細砂混粗砂
- 9 2.5Y2/1 黒褐色シルト 粘質
- 10 2.5Y3/1 黒褐色細砂~シルト混粗砂
- 11 2.5Y6/2 灰黄色粗砂、φ1~2cmの礫多量含む
- 12 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂、φ1~2cmの礫・7.5Y4/1 灰色粘質土ブロック含む

図13 井戸42実測図（1：40）

跡があることから、礎石を井戸の石組に転用している。また、石積みの間には瓦を使用している箇所がある。埋土からは土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器などの土器類や瓦類などが出土した。土器類は小片であるが、平安時代後期から室町時代のものである。

整地層1 調査区南西隅の一部を除き、ほぼ全域で確認した。整地層1上面の標高は、調査区南西部で44.65m、北東部で44.8m、層の厚さは0.1~0.25m前後である。土師器小片を多数含み、一部では比較的破片の大きな土師器皿が出土した。また、調査区西壁付近では5~10cm大の礫と瓦が多量に包含する箇所が見られた（集石2）。出土した遺物の年代は、平安時代末期から鎌倉時代初

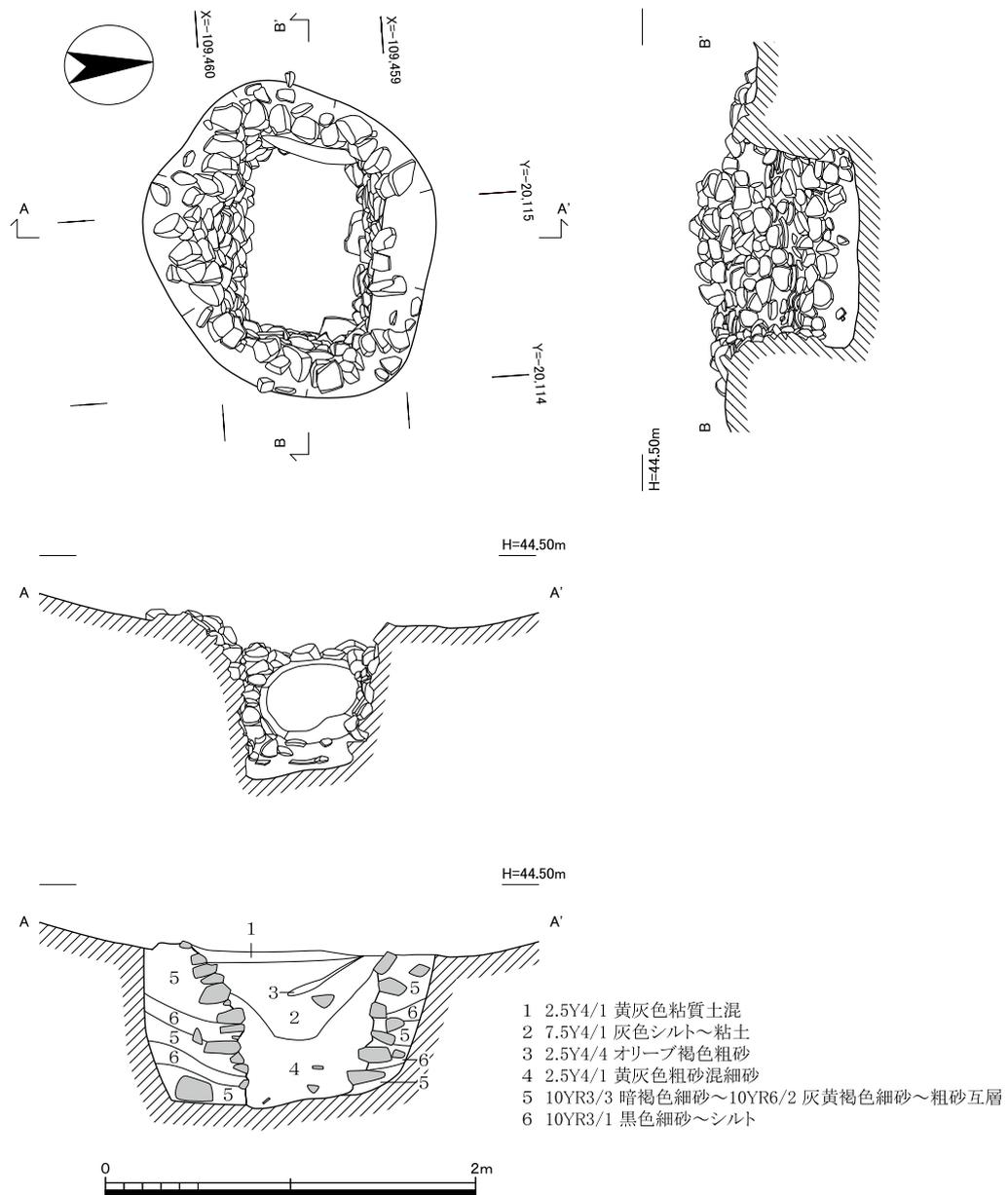


図14 井戸45実測図（1：40）

頭（12世紀末期）である。

第2面の遺構（図12・15・16、図版2）

土坑15（図16） 調査区北部で検出した楕円形の土坑で、断面形は上部が開くロート状である。長径1.8m、短径1.1m、深さ0.7m、底部の標高は43.65mである。埋土は0.1～0.2m大の石と瓦を多量に含み、締まりがない。湿気抜きのためのものと考えられる。

土坑32（図16） 調査区中央北部で検出した径1.1m、深さ0.5mの円形の土坑で、0.1～0.2m大の礫が密に詰まることから、礎石据付穴と考えられる。底部の標高は44.05mである。埋土から土師器小片が出土した。12世紀代、平安時代後期から末期に属する。

土坑43（図16） 調査区北部で検出したやや楕円形となる土坑で、短径0.7m、長径0.8m、深さ0.51m、底部の標高は43.66mである。埋土は0.15～0.2m大の石と瓦を多量に含み、締まりがない。

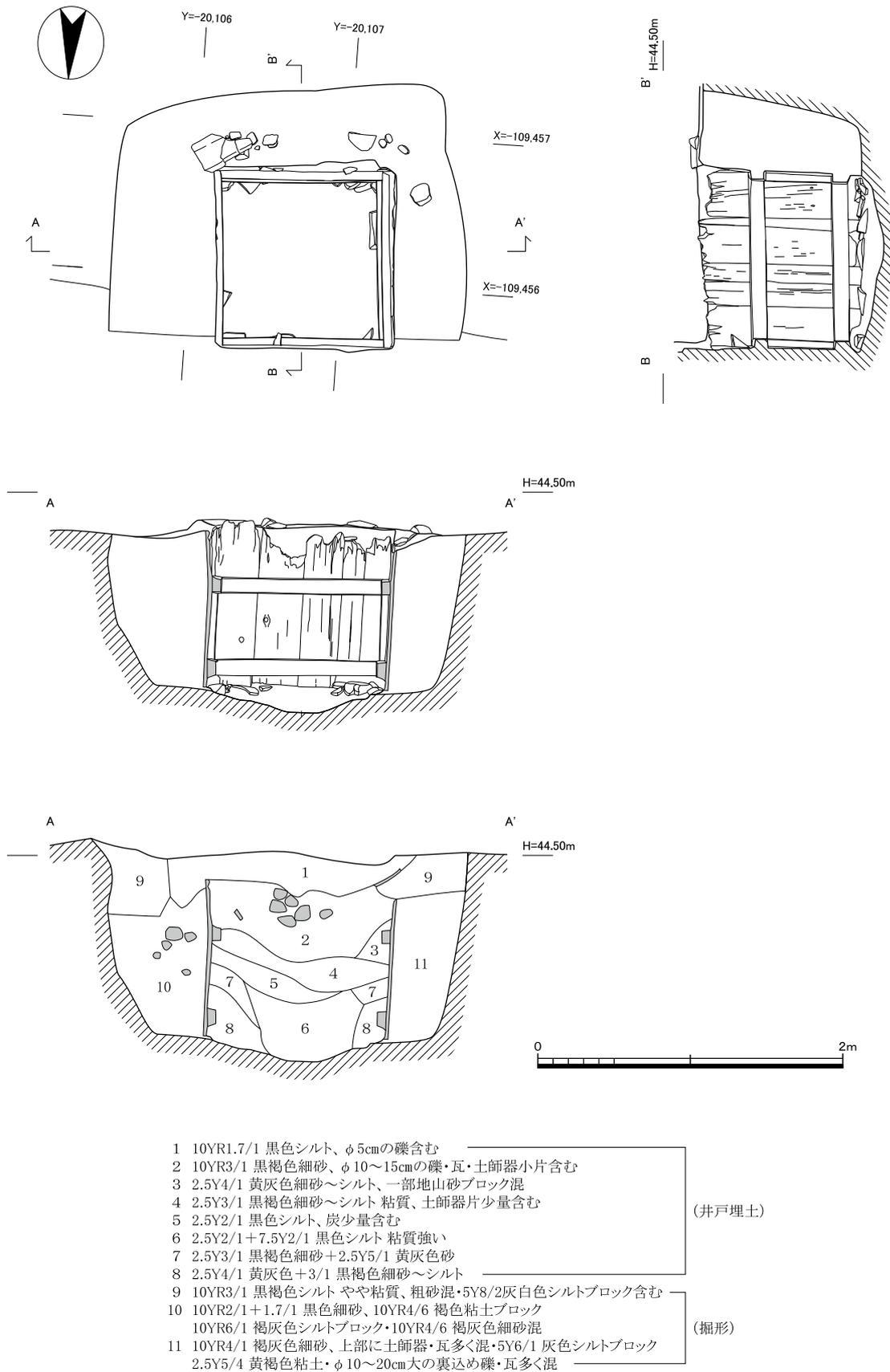


図15 井戸46実測図 (1:40)

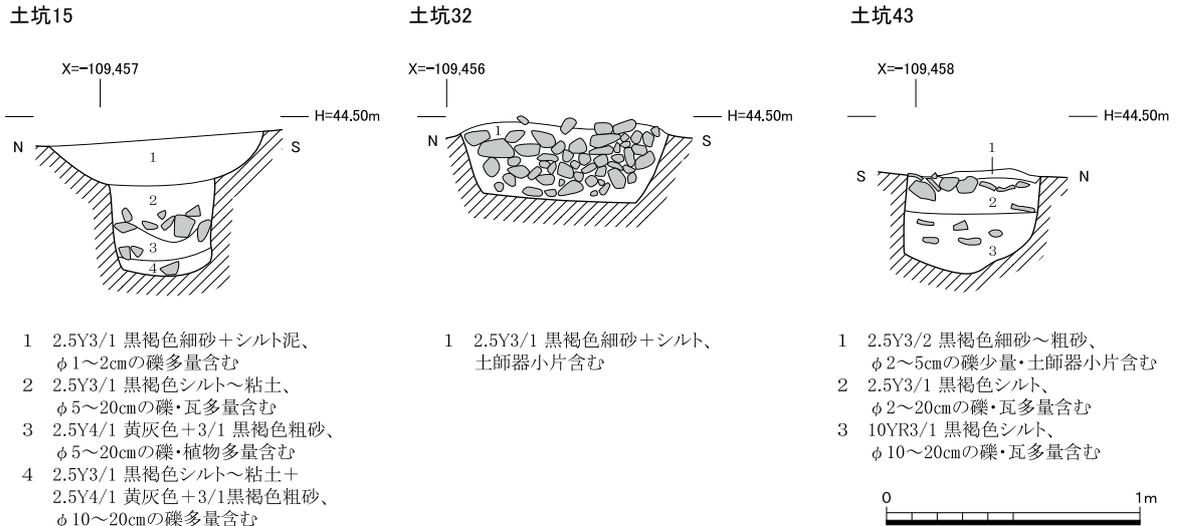


図16 土坑15・32・43断面図（1：40）

土坑15と同じく湿気抜きのためのものと考えられる。

井戸46（図15、図版3） 調査区北東部、北壁沿いで検出した方形縦板横棧支柱式の井戸である。掘形は方形で東西2.37m、南北1.8m以上、深さは1.14m、底部の標高は43.05mである。北辺は調査区外へ続く。底面には径0.2m大の石や平瓦を据える。井戸枠は北・南辺は1.05m、西・東辺は1.3mの横板を方形に2段に組み、四隅に支柱を立てて、横棧の外側に立てた縦板を支えるように造られる。縦板は幅約0.3m×4枚が一辺となる。土師器・瓦器・山茶碗・焼締陶器・輸入陶磁器などの土器類や瓦類などが出土した。12世紀後半、平安時代後期から末期の遺物が含まれる。

整地層2（図12、図版2） 整地層1の下層から検出した。整地層2上面の標高は調査区南西部で44.3m、北東部では44.4mである。整地層2はほぼ全域で検出した。下層には自然堆積の湿地状を呈する層や自然流路などがあり、それらを埋めて平坦に整地したものと思われる。とくに地盤が緩い、あるいは凹んだ地形などの箇所には、礫や瓦が大量に投入されており、地盤強化のために使用されたと思われる。礫とともに瓦類や土師器などの土器類が多量に混入されている。土器や瓦が集中的に出土した箇所や石が大量に投棄された箇所は土器集中、瓦集中、集石として個々に遺構番号を付したが、すべて整地層2に伴うものとした。整地層2から出土した土器は平安時代後期のもので、延勝寺造営時の造成に伴うものと思われる。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

遺物は整理用コンテナに138箱出土した。その内訳は土器・瓦類が134箱、木製品が3箱、石製品が1箱である。土器類が圧倒的に多く、次いで瓦類である。出土遺物の時期は弥生時代、古墳時代、平安時代、鎌倉時代から室町時代、江戸時代の各時期である。平安時代後期から末期の遺物が最も多く、それ以外のものは微量である。

弥生時代から古墳時代の遺物は極少量であるが、後世の遺構に混入して出土している。弥生時代の石鏃、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器などである。

平安時代の遺物は、整地層1、整地層2、井戸などから出土している。土師器・須恵器・白色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・瓦器・山茶碗・土師質土器・須恵質陶器・焼締陶器・輸入陶磁器などの土器類、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・鴟尾などの瓦類、土製円塔、石製品、木製品などがある。

鎌倉時代から室町時代の遺物は微量で、井戸42や耕作溝などから出土している。土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器、瓦類、埴などがある。

江戸時代の遺物は、溝1から出土している。土師器・染付・施釉陶器などがある。

(2) 土器類（図17～20、図版4・5、付表1）

土器類は、弥生時代、古墳時代、平安時代、鎌倉時代から室町時代、江戸時代の各時代の遺物が出土している。種類は多種にわたるが、土師器皿以外のものは小破片のものが多。整地層2、整地層1からは多数の土器類が出土した。特に整地層2では良好な出土状況であった箇所を抽出し

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代 ～古墳時代	弥生土器、土師器、須恵器、石鏃		弥生土器1点		
平安時代	土師器、須恵器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、山茶碗、土師質土器、須恵質陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、土製円塔、石製品、木製品		土師器52点、白色土器5点、山茶碗4点、土師質土器2点、須恵質陶器1点、白磁7点、瓦43点、土製円塔5点、石製品1点、木製品1点		
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、埴				
江戸時代	土師器、染付、施釉陶器、焼締陶器、瓦、土製品、金属製品				
合計		147箱	122点（7箱）	6箱	134箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より9箱多くなっている。

て掲載した。以下に主要な遺物の概略を述べる。各遺物の詳細は付表1に示した。

弥生土器(1) 1は弥生土器の広口壺で、口径19.0cm、残存高24.6cmである。口縁端部を下方に屈曲し、端面には上段は一条1単位、下段は三条1単位の櫛描波状文が2帯巡る。頸部外面から体部外面には三条1単位の櫛描直線文を9帯、その下方には三条1単位の波状文が2帯巡る。口縁部内面はハケ目、頸部から体部はナデ調整を施す。弥生時代中期(山城Ⅱ様式後半)である。²⁾ 整地層2から出土したが、下層の混入である。

整地層2出土土器(2~54) 2~40は土師器皿、2~6はいわゆる「て」字状口縁で、口径は9.4~9.8cmと小型である。7~18・22~35は口縁部が外反気味に立ち上がり、多くが口縁部を二段ナデする。7~9・11・22~28・32~35は口径が8.8~10.1cmの小型である。27は口縁端部に煤が付着していることから灯明皿である。10・12~18・29~31・36~40は口径が14.2~16.1cmの大型である。19~21は口径が8.5~8.9cm、器高は1.0~1.4cmのコースター型である。平安京Ⅳ期新段階からⅤ期中段階³⁾に位置付けられる。

41~45は白色土器、41は蓋、天井部に丸いつまみを貼り付ける。残存径は6.4cm、残存高1.9cmである。42は皿で、口径は8.9cm、器高は2.9cm、高台は貼付で、底部を糸切りするものである。43は小型三足盤、復元口径は9.6cm、器高は2.1cmである。脚部は面取りされ貼付する。41~43はロク口によって成形される。44・45は高杯の脚部で、残存高は11.7cm・12.7cmである。44は16面、45は14面のケズリ調整により面取りを行う。

46・47は土師質土器、46体部外面に粘土紐の継ぎ目を明瞭に残す。復元口径は24.8cm、残存高は6.1cmである。鉢としたが、外面に煤が付着するため、煮沸容器に使用したと考えられる。47は小型椀で、口径は7.6cm、残存高は3.0cmである。色調はにぶい橙色を呈する。

48~50は灰釉系陶器でいわゆる山茶椀である。48は口径が7.9cmの小型椀、49は口径が14.1cmの椀である。49は底部外面に糸切り痕を残し、粗雑な高台が付く。50は底部のみであるが、底径は16.8cm、高い高台が付く。高台の接地面には朶痕が残る。

51は須恵質陶器の甕で、口径は26.4cm、残存高は9.4cmである。体部外面は格子目タタキ、内面はハケ目調整を施す。美作の勝間田焼である。出土した破片のすべてを接合できなかったが、同一個体が広範囲で出土した。

52~54は輸入陶磁器の白磁椀である。52は底部を欠損するが口径は14.8cm、口縁端部を肥厚させ玉縁状にする。53・54は底部のみで削り出し高台である。

井戸46出土土器(55~58) 55~58は土師器皿、55はコースター形、56・57は口径9.4cm・10.4cmの小型、58は口径13.6cmの大型の皿である。平安京Ⅴ期中段階から新段階に位置付けられる。

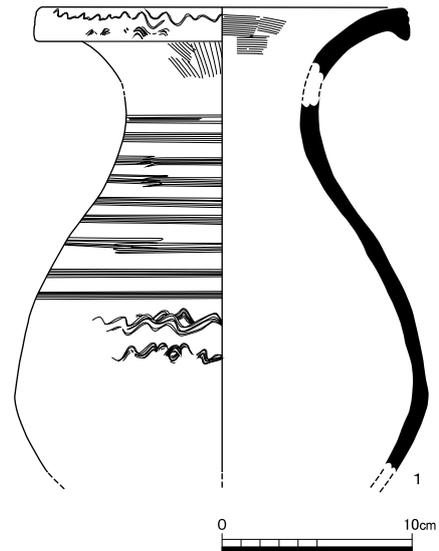


図17 整地層2出土弥生土器実測図(1:4)

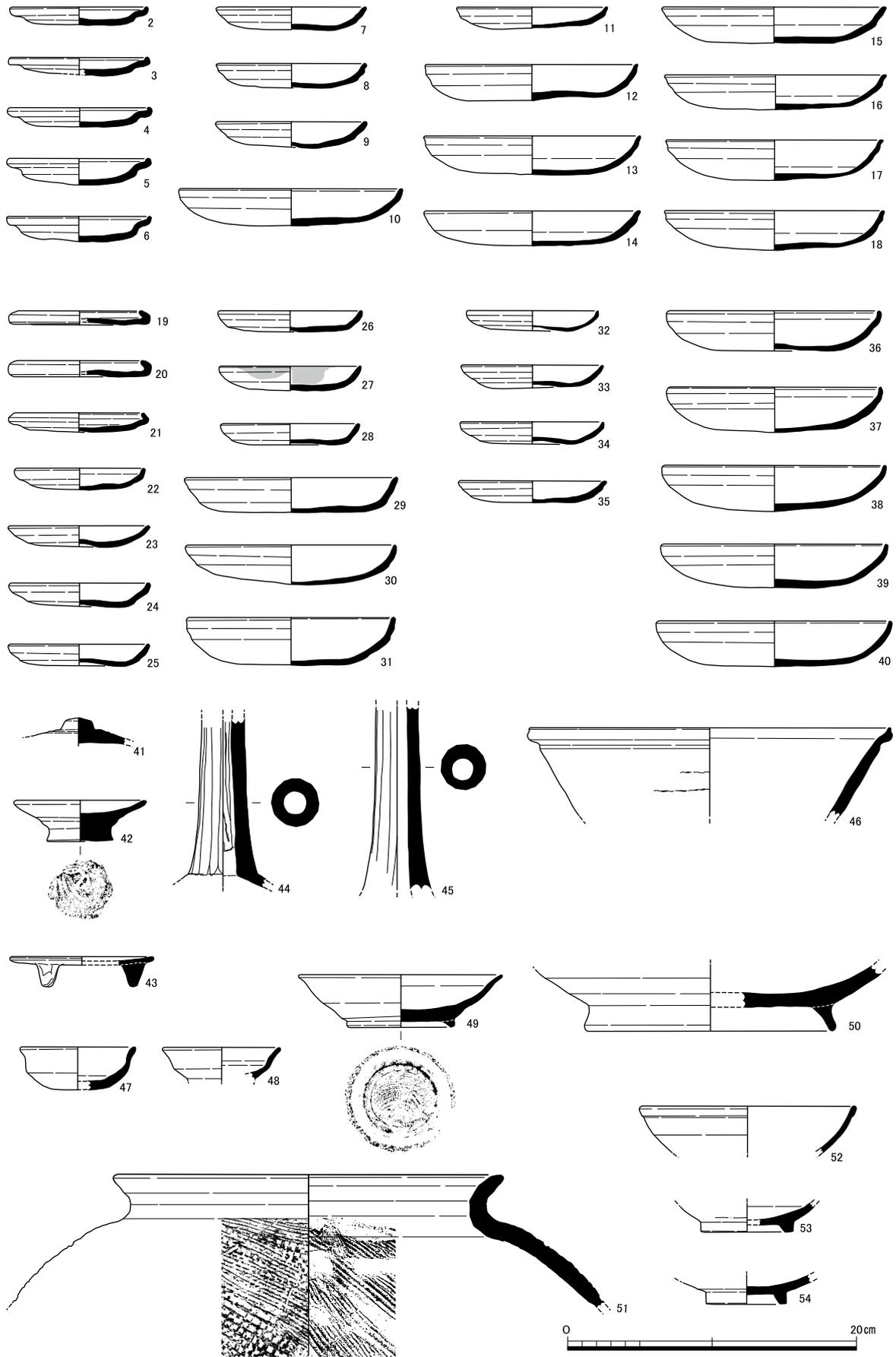


图18 整地层2出土土器实测图 (1:4)

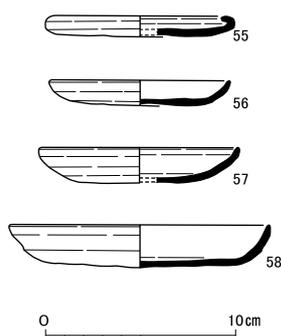


図19 井戸46出土土器
実測図(1:4)

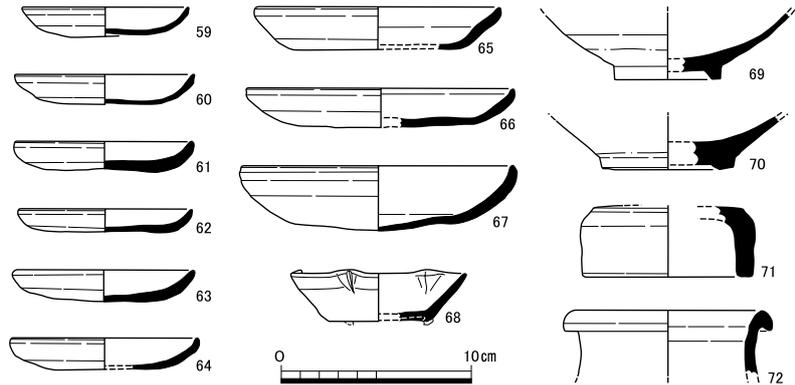


図20 整地層1出土土器実測図(1:4)

整地層1出土土器(59~72) 59~67は土師器皿で、59~64は口径8.7~9.6cmの小型の皿、65~67は口径12.8~14.1cmの大型の皿である。平安京V期新段階からVI期古段階に位置付けられる。

68は山茶碗の小型鉢で、口径9.1cm、口縁端部にヘラ状工具をあて輪花とする。底部外面は糸切り、外面をヘラ状工具で外側に掻き寄せて小さな脚をつくる。

69~72は輸入磁器の白磁、69・70は碗の底部で、削り出し高台である。71は蓋で、復元口径8.7cm、天井部と体部の間に沈線が巡る。端部は平坦で、端部と内面には施釉しない。72は壺の口縁部で、口縁端部は強く外反させる。やや青みがかった白色の施釉である。

(3) その他の遺物(図21・22、図版5、付表2)

土製品(土1~5) 土1~5は土製円塔である。土2は剥離しているが、それ以外は半球状の上部から鍔部上面に緑釉が施される。型により成形されており、中実である。土5は型抜きのための布目痕が、外面全面に顕著に残る。土2・5は底部に指圧痕が残る。土1・3・4は底部をナデで仕上げる。

石製品(石1) 石1は小型の砥石である。残存長8.2cm、幅3.5cm、厚さ0.5~0.9cmである。側面、上端面は垂直に加工し、片面に使用痕が認められ、裏面は自然面である。堆積岩製で整地層1から出土した。

木製品(木1) 木1は木製品の工具と考えられる。先端には0.5cm以上の刷毛状の切り込みが11箇所残存し、持ち手上辺は指が収まりやすくするための加工が施されている。上部には穴を穿つ。

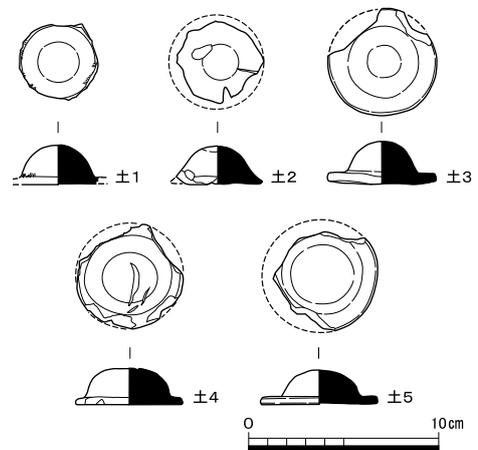


図21 出土土製円塔実測図(1:4)

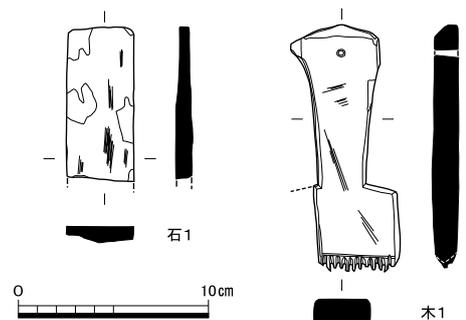


図22 出土石製品・木製品実測図(1:4)

(4) 瓦 類 (図23～26、図版6・7、表4、附表3)

瓦類は、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、鴟尾、丸瓦、平瓦が、整地層1・2、井戸42・45・46、土坑43などから出土した。とくに整地層2では瓦が大量に出土した。また、井戸46からは、備前・備中系の瓦の一括資料が得られた。

瓦の時期は、平安時代後期から末期のものが大半で、産地は播磨系、山城系、備前・備中系、丹波系と産地不明品がある。軒丸瓦は全部で77点、軒平瓦は59点、鬼瓦は2点、鴟尾は1点出土した。鬼瓦、鴟尾は小片である。その

内、播磨系軒丸瓦は39点、軒平瓦19点、山城(京都)系軒丸瓦は26点、軒平瓦29点、備前・備中系軒丸瓦は7点、軒平瓦5点、丹波系軒丸瓦は2点、軒平瓦1点である。産地不明の中には山城系と思われるものが6点含まれる。以下に主要な瓦類についての概略を述べる。なお、井戸46からは備前・備中系の瓦の一括資料を得たため、それらは別項として記述する。

軒瓦の産地別については表4に、掲載した瓦の出土遺構や調整技法などについては附表3の観察表にまとめた⁴⁾。

軒丸瓦 (瓦1～17) 瓦1～8は播磨系の軒丸瓦、平安時代後期のものと考えられる。瓦1・2は右巻きの三巴文、焼成は非常に硬質で自然釉が付く。瓦2はほぼ完形である。瓦3～8は蓮華文、瓦4は単弁十六弁、それ以外は複弁八弁である。瓦6は瓦当面に二筋の範傷がある。瓦7は中房の周囲に蕊帯が巡り、間弁は水滴状で連続する特長が見られる。瓦7・8は尊勝寺、円勝寺の出土瓦と同文である。

瓦9～14は山城(京都)系の軒丸瓦、平安時代後期のものと考えられる。瓦9～11は蓮華文、瓦11は瓦当面に二筋の範傷が見られる。瓦12～14は巴文、瓦12は中央に三巴を配し、鋸歯状文を周囲に巡らせる。瓦13は右巻きの二巴、瓦14は左巻きの三巴である。

瓦15～17は備前・備中系の蓮華文軒丸瓦、平安時代後期のものと考えられる。蓮弁が宝珠形であることと、瓦当部裏面を丁寧にナデ調整する特長が見られる。今回出土した備前・備中系の瓦には、色調が赤系と灰色系とが見られるが、瓦15～17は灰色系である。

軒平瓦 (瓦18～36) 瓦18～24は播磨系の唐草文軒平瓦、平安時代後期のものと考えられる。瓦19以外は瓦当部成形が播磨系軒平瓦の特徴である包込み技法により行われている。

瓦25は丹波系の唐草文軒平瓦、平安時代後期のものと考えられる。瓦当部成形は折曲げ技法で、折曲げ後に縄目タタキで調整を施す特長が見られる。

瓦26～34は山城系の軒平瓦で、平安時代後期のものと考えられる。瓦26・28は右方向の偏行唐草文、27・29は外行唐草文、30は内行唐草文、31は幾何学文、32～34は剣頭文である。いずれも瓦当部成形は折曲げ、半折曲げである。

瓦35・36は備前・備中系の外行唐草文軒平瓦で、平安時代後期のものと考えられる。備前・備

表4 軒瓦産地別計数表

産地	軒丸瓦	軒平瓦	計
播磨	39	19	58
山城	26	30	55
備前・備中	7	5	12
丹波	2	1	3
不明	3	4	8
計	77	59	136

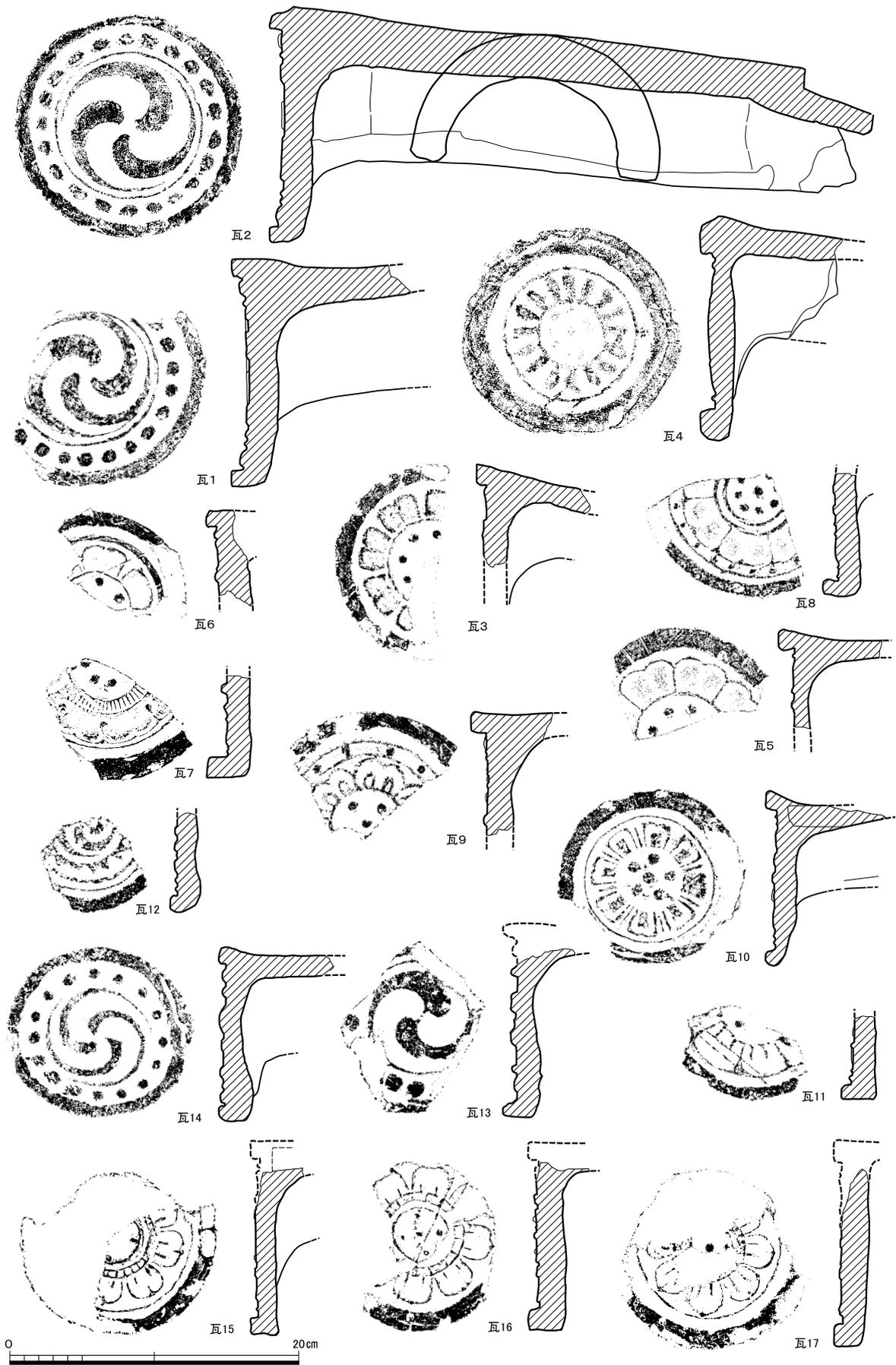


图23 出土軒丸瓦拓影·实测图 (1:4)

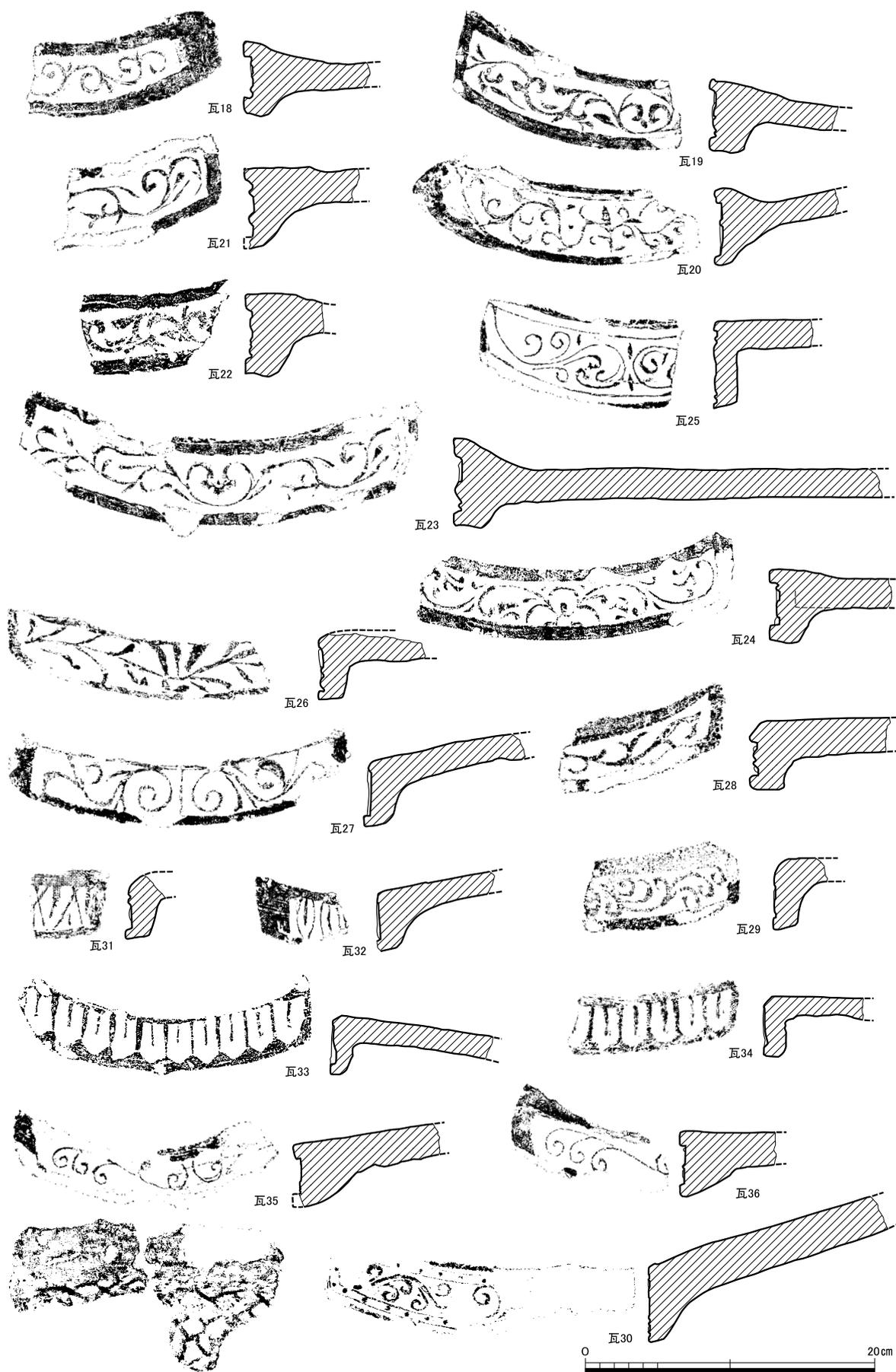


图24 出土軒平瓦拓影·实测图 (1 : 4)

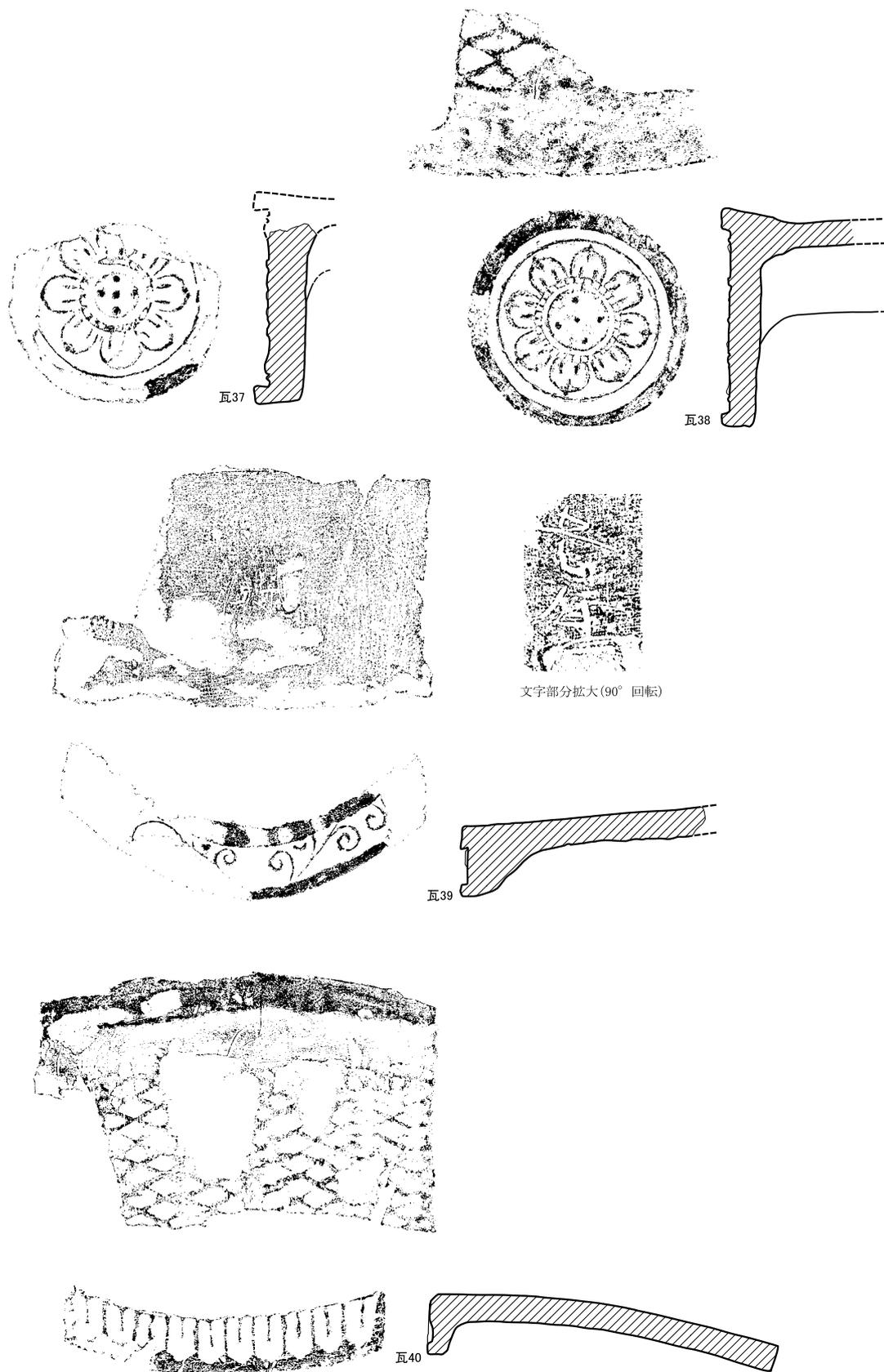


图25 井戸46出土軒丸瓦・軒平瓦拓影・実測図(1:4)

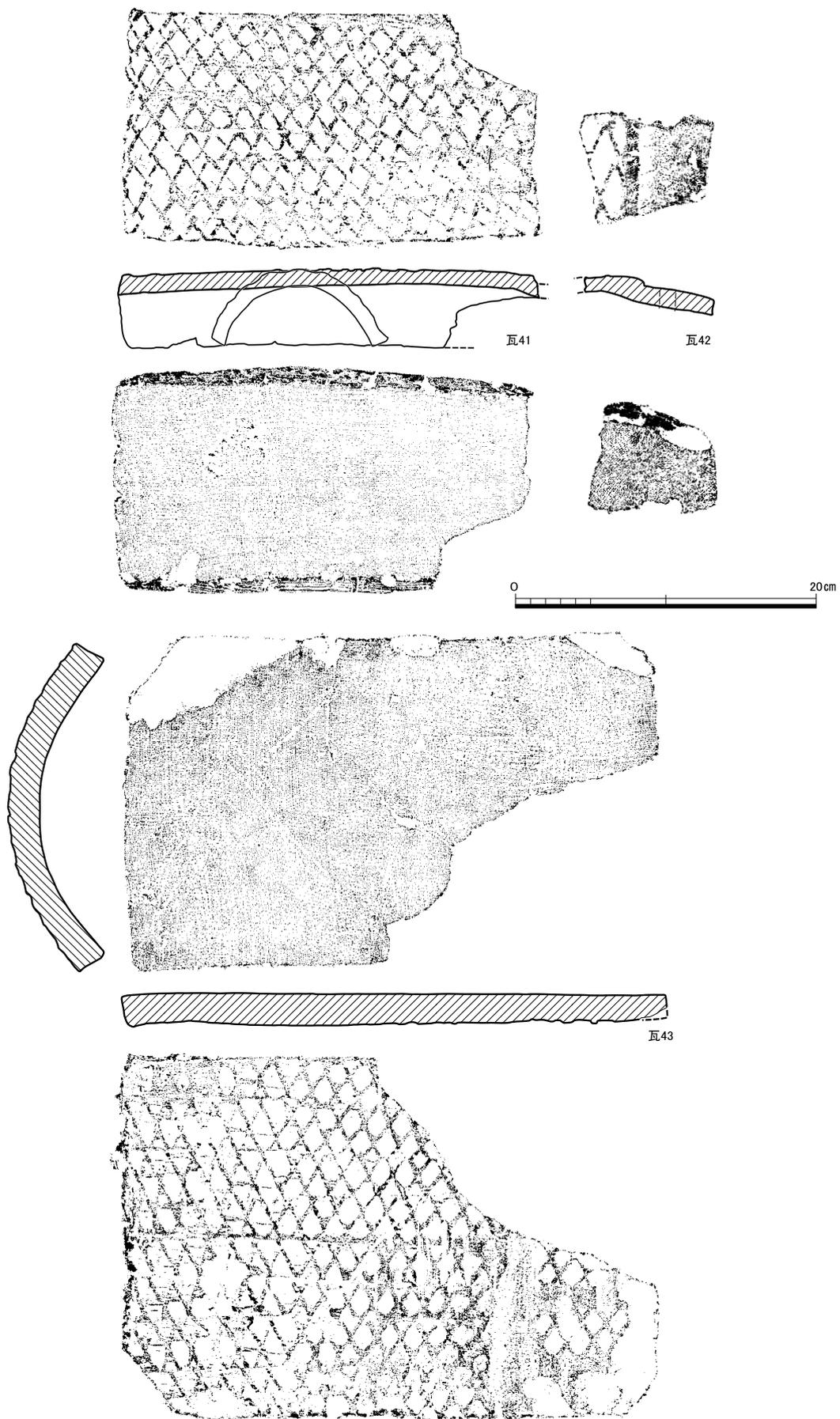


图26 井戸46出土丸瓦·平瓦拓影·实测图(1:4)

中系平瓦部の特徴である平瓦部の凸面に大きな斜格子タタキ、凹面には布目が残る。平瓦部の反りが大きい。

井戸46出土瓦（瓦37～43） 瓦40以外は備前・備中系の軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦である。すべて平安時代後期のものと考えられる。

瓦37・38は複弁八弁蓮華文軒丸瓦で前述の瓦15～17と同じく蓮弁が宝珠形で、瓦当部裏面を丁寧にナデ調整する。瓦38は丸瓦部の凸面に大きな斜格子タタキ、凹面には布目が残る。

瓦39は外行唐草文軒平瓦、唐草の上部が欠けることから、瓦当上部を切り詰めたと思われる。前述の瓦35・36と同じく平瓦部の凸面に大きな斜格子タタキ、凹面には布目残り、平瓦部の反りが大きい。平瓦部の凹面にヘラ描きによる文字が見られるが判読できない。

瓦40は山城系の剣頭文軒平瓦、陰刻の剣頭文を垂直に配する。平瓦部の凸面にヘラ記号が見られる。

瓦41・42は別個体の丸瓦である。瓦41は玉縁部分が欠損しているが、瓦42と同様の玉縁部が付くと考えられる。瓦42には釘穴が認められる。

瓦43は平瓦、凸面に大きな斜格子タタキ、凹面には布目が残る。

備前・備中系の瓦35・36・39と同文の瓦は、京都市内では平安宮民部省・式部省の調査で出土している。瓦37・38と同文の瓦は岡山県備前木蔵神社から、備中浅原寺の調査では軒平瓦と同文の瓦が出土している。

5. まとめ

今回の調査地は白河街区内の南西に位置する六勝寺の一寺院、延勝寺跡に推定されている。白河街区には、平安京と類似した地割が想定されており、複数の地割復元が提示されている⁵⁾。

延勝寺に関する文献史料は少なく、建物の位置関係などを示す史料はない。寺域を示す史料としては『明月記』、『門葉記』に寺域南限は押小路末、西限は仏所小路、北限は二条大路末に面するとあり、寺域は南北1町、東西2町と推定されている。六勝寺全体では、法勝寺・尊勝寺以外は伽藍配置や寺の位置が確定していないのが現状である。

延勝寺は久安5年（1149）に近衛天皇の御願寺として造営され（『本朝世紀』など）、長寛元年（1163）には近衛天皇の寝殿を移築して九体阿弥陀堂としている。承久元年（1219）には、白河殿辺りでは出火した火災により塔・金堂が焼失している（『百練抄』）。この後には延勝寺関連の文献史料がみられない。廃絶の時期は室町時代とされるが詳細は不明である⁶⁾。

今回の調査地の北・南では、1972年・1973年に六勝寺研究会が調査を実施しており（調査2・3）、庭園、池、基壇地業跡などが見つかっているが、周辺の調査からは延勝寺に関連する柱穴や雨落ち溝など直接的に建物の位置関係や寺域を示す溝や築地などの遺構は検出されていない。

今回の調査では、平安時代後期（整地層2）と平安時代末期から鎌倉時代初頭（整地層1）の上下2時期の整地層を検出した。下層の整地層2は湿地を埋めて平坦面を造りだしたものである。特に地盤が緩い、あるいは凹んだ地形などの箇所には、礫や瓦が大量に投入されて、地盤強化が図られている。延勝寺造営時の造成に伴うものと思われ、井戸46はこの上面で検出した。また、礎石据付穴と考えられる土坑32を検出している。今回は関連する遺構は検出できていないが、当地に何らかの建物が存在したことを示す遺構として評価できる。

一方、上層の整地層1は造営の後の再整備に関わる整地層と考えられ、数少ない文献史

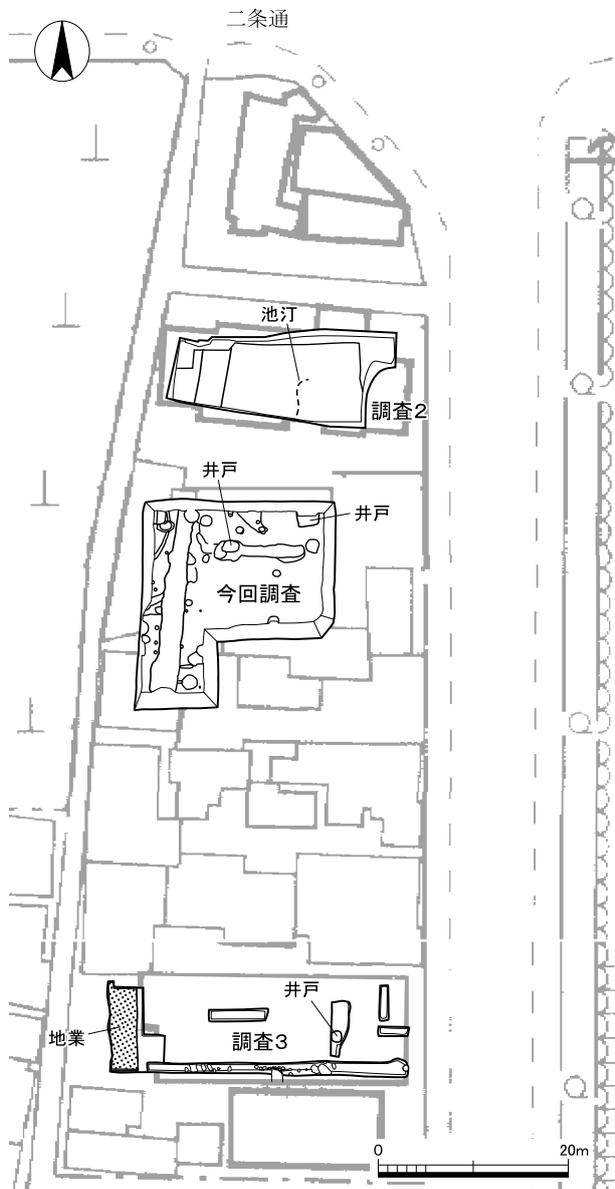


図27 1972・1973年度の周辺調査位置図（1：800）

料の記述によれば、元暦2年（1185）の大地震、あるいは承久元年（1219）の塔・金堂の焼失などを契機とした整地であったとみてよいかもしれない。なお、この層の上面で検出した井戸などの遺構は室町時代には埋没し、全面が室町時代とみられる耕作土に覆われることから、延勝寺は室町時代には廃絶したと言えよう。

今回の調査では、延勝寺の建物に関連する明確な遺構は検出できなかったが、延勝寺に関連すると考えられる大規模な整地や井戸などを検出できたことは、調査の大きな成果である。

また、今回の調査で注目されるのは136点の軒瓦が出土したことがあげられる。播磨系、山城系、丹波系、備前・備中系と様々な産地の瓦が出土するのは、白河街区跡での他の調査と同様であったが、その中で備前・備中系の瓦については、一括資料が得られた。今回の調査で出土した軒平瓦と同文と思われる備前・備中系の瓦は京都市内では平安宮民部省・式部省の調査で出土している。備前・備中系の瓦は平安時代後期の平安宮内での搬入瓦の中での割合は少数であった。これらが今後、平安時代後期の搬入瓦の検討に寄与する成果となることを期待する。

註

- 1) 上村和直「院政と白河」『平安京提要』角川書店 1994年、『京都市の地名』平凡社 1979年
- 2) 森岡秀人「山城地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社 1990年
- 3) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 4) 瓦については以下を参照した。
上原真人「瀬戸内海を渡った瓦」『大阪湾をめぐる文化の流れ—もの・ひと・みち—』帝塚山考古学研究所 1987年
上村和直「後期の瓦」『平安京提要』角川書店 1994年
上村和直「平安宮の衰微」『研究紀要』第10号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年
『木村捷三郎収集瓦図録』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
「浅原寺跡」『倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第1集』倉敷市教育委員会 1984年
- 5) 福山敏男「六勝寺の位置」『日本建築史研究』墨水書房 1968年
杉山信三『六勝寺と白河御所』講演会資料 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 6) 上村和直「院政と白河」『平安京提要』角川書店 1994年

付章 京都盆地東部、延勝寺跡・岡崎遺跡における 遺構面下の地質

小野映介（新潟大学）・河角龍典（立命館大学）

（1）はじめに

京都盆地東部、東山の山麓扇状地と鴨川氾濫原の境界部に位置する延勝寺跡・岡崎遺跡において、遺構検出後の深掘り調査に参加する機会を得た。それにより、詳細な地質情報が得られたので報告する。

（2）層相・層序

深掘りトレンチにおける観察は、北側断面の深さ1.02m（標高43.10～44.12m）、幅1.00mを対象として行った。なお、発掘調査区の現地表面は46.20mである。

調査断面の層相は、下位より①粗粒砂層、②細粒砂や礫を含む有機質シルト層、③有機質シルト層、④シルト層、⑤火山灰層、⑥中粒砂層、⑦粗粒砂層、⑧有機質シルト層に区分できる（図28）。

①層は粒径が1mm程度の砂によって構成されており、淘汰が良い。一方、②層は分解の進んだ有機質を比較的多く含むシルトを基質としているが、細粒砂や粒径1mm程度の礫を多く含む。その上位の③層は分解された有機物を多量に含むシルトからなり、粗粒堆積物の混入は認められない。④層は主としてシルトによって構成されているが、下部には有機物の薄いレンズ状堆積、中～上部には中粒砂のレンズ状堆積が認められる。それを覆う⑤層は厚さ0.05～0.10mの火山灰である（同定

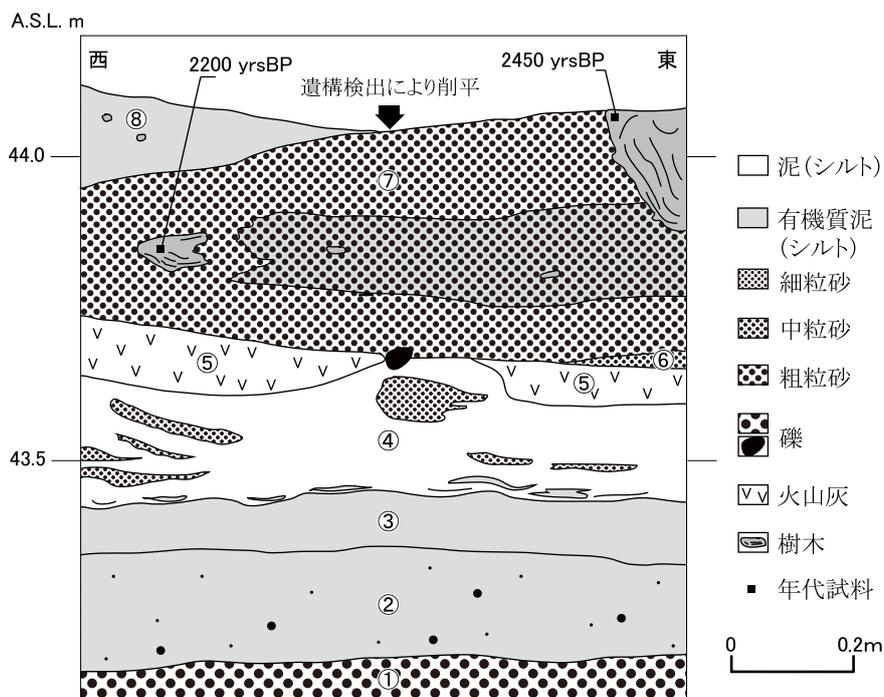


図28 深掘りトレンチ北断面

表5 年代測定結果

緯度 経度	標高(m)	試料	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	同位体分別補正 ^{14}C 年代(yrs BP)	暦年代 (2σ)	ラボNo.
35° 00' 47.50" N	44.06	木片	-27.2	2200±30	BC 370-180	Beta-382159
135° 46' 47.01" E	43.85	木片	-28.2	2450±30	BC 760-410	Beta-382160

分析を依頼中)。同層の最下部は中粒であるのに対し、上部は極細粒からなり、上方細粒化が認められる。⑥層は淘汰の良い中粒砂からなり、調査断面東側の一部でしか確認できなかった。また、⑦層は比較的淘汰の良い粗粒砂によって構成され、有機質の卓越する部分や樹木の混在が確認された。その上位の⑧層は、未分解の有機物を多く含むシルト層である。なお、⑦層と⑧層については発掘調査によって上部が掘削され、欠損している。

(3) 採取試料の ^{14}C 年代値

⑦層に含まれる樹木遺体2点から年代測定用の試料を採取した。1点は⑦層に完全に包含された長さ約0.12m、幅約0.08mの小片であるが、もう1点は、長さ幅ともに0.20mを超える比較的大きな遺体で、上部は遺構検出にともなって失われていた。

試料の ^{14}C 年代測定は、地球科学研究所に依頼した。測定結果は表5に示したとおりである。いずれも2200yrsBP・2450yrsBPと弥生時代前半に対応する値が得られた。

(4) 調査結果の意義

本遺跡周辺では、数地点で始良Tn(AT)火山灰が検出されている(池田・石田1972;内田1994など)。⑤層がAT火山灰であるとするれば、当地域における最終氷期以降の地形発達(東山山麓の扇状地・鴨川の氾濫原の形成過程)を解明する上での貴重なデータが追加されたことになる。

また、弥生時代前半の洪水堆積層が検出された点は注目し値する。この洪水堆積は、富井(2008)が指摘した北白川追分町遺跡における弥生時代前期末の白川土石流に対応する可能性がある。

今後、本遺跡で得られたデータを精査したうえで上述の点を検討していきたい。

引用文献

- 池田碩・石田志朗 1972. 平安神宮神苑内の火山灰層上下の木材と泥炭の年代. 地球科学26, 179-181.
 内田好昭 1994. 法勝寺・岡崎遺跡. 平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要. 84-86.
 富井 眞 2008. 土石流は初期農耕の地をどう通り過ぎたか-京都市北白川追分町遺跡の白川弥生土石流の堆積物調査-. 京都大学埋蔵文化財研究センター紀要 XVIII, 187-208.

付表1 出土土器観察表

No.	器種	器形	遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土・色調・焼成	備考
1	弥生土器	壺	整地層2	(19.0)	24.6		胎土密、長石・石英・チャート含む、2.5Y8/3淡黄色、焼成良。	
2	土師器	皿	整地層2	9.4	1.3		胎土密、長石・石英・チャート・雲母・赤色粒含む、10YR7/4にぶい黄橙色、焼成良。	
3	土師器	皿	整地層2	9.4	1.3		胎土密、長石・雲母・赤色粒含む、10YR8/3浅黄橙色、焼成良。	
4	土師器	皿	整地層2	9.7	1.4		胎土密、長石・石英・赤色粒含む、10YR8/3浅黄橙色、焼成良。	
5	土師器	皿	整地層2	9.6	1.9		胎土密、長石・石英・チャート・雲母含む、10YR8/4浅黄橙色、焼成良。	
6	土師器	皿	整地層2	9.8	1.8		胎土密、長石・石英・チャート・雲母・赤色粒含む、10YR7/4にぶい黄橙色、焼成良。	
7	土師器	皿	整地層2	10.1	1.7		胎土密、長石・石英・雲母含む、10YR8/4浅黄橙色、焼成良。	
8	土師器	皿	整地層2	10.1	1.8		胎土密、長石・石英・チャート・雲母含む、2.5Y8/3淡黄色、焼成良。	
9	土師器	皿	整地層2	10.2	1.9		胎土密、長石・雲母含む、2.5Y7/2灰黄色、焼成良。	
10	土師器	皿	整地層2	15.2	2.6		胎土密、長石・石英・チャート・赤色粒含む、7.5YR8/3浅黄橙色、焼成良。	
11	土師器	皿	整地層2 (落込26)	10.3	1.5		胎土密、長石・石英・チャート含む2.5Y7/2灰黄色、焼成良。	
12	土師器	皿	整地層2 (落込26)	14.5	2.5		胎土密、石英・雲母含む、2.5Y7/3浅黄色、焼成良。	
13	土師器	皿	整地層2 (落込26)	14.8	2.7		胎土密、長石・赤色粒含む、10YR8/4浅黄橙色、焼成良。	
14	土師器	皿	整地層2 (落込26)	14.8	2.5		胎土密、長石・雲母・赤色粒含む、7.5YR8/6浅黄橙色、焼成良。	
15	土師器	皿	整地層2 (落込26)	15.3	2.5		胎土密、長石・雲母・チャート含む、10YR7/3にぶい黄橙色、焼成良。	
16	土師器	皿	整地層2 (落込26)	15.2	2.5		胎土密、長石・石英・チャート・雲母・赤色粒含む、10YR7/2にぶい黄橙色、焼成良。	
17	土師器	皿	整地層2 (落込26)	14.8	2.8		胎土密、長石・石英・チャート・雲母含む、10YR7/3にぶい黄橙色、焼成良。	
18	土師器	皿	整地層2	15.1	2.8		胎土密、長石・雲母・チャート含む、10YR8/3浅黄橙色、焼成良。	
19	土師器	皿	整地層2	8.5	1.0		胎土密、長石・雲母含む、7.5YR8/4浅黄橙色、焼成良。	
20	土師器	皿	整地層2	8.6	1.2		胎土密、長石・チャート・雲母・赤色粒含む、2.5Y8/3淡黄色、焼成良。	
21	土師器	皿	整地層2	8.9	1.4		胎土密、長石・雲母含む、2.5Y8/3淡黄色、焼成良。	
22	土師器	皿	整地層2	8.8	1.6		胎土密、長石・雲母含む、10YR8/4浅黄橙色、焼成良。	
23	土師器	皿	整地層2 (落込26)	9.6	1.5		胎土密、長石・雲母・赤色粒含む、10YR8/4浅黄橙色、焼成良。	
24	土師器	皿	整地層2 (落込26)	9.5	1.7		胎土密、長石・雲母・赤色粒含む、10YR7/4にぶい黄橙色、焼成良。	
25	土師器	皿	整地層2 (落込26)	9.5	1.6		胎土密、長石・チャート・雲母含む、10YR7/4にぶい黄橙色、焼成良。	
26	土師器	皿	整地層2 (落込26)	9.8	1.5		胎土密、長石・チャート・雲母・赤色粒含む、10YR8/3浅黄橙色、焼成良。	
27	土師器	皿	整地層2 (落込26)	9.6	1.8		胎土密、長石・チャート・雲母含む、10YR7/3にぶい黄橙色、焼成良。	灯明皿
28	土師器	皿	整地層2 (落込26)	9.4	1.5		胎土密、長石・チャート・雲母・赤色粒含む、10YR8/3浅黄橙色、焼成良。	
29	土師器	皿	整地層2 (落込26)	14.6	2.5		胎土密、長石・チャート・雲母含む、2.5Y8/3淡黄色、焼成良。	

No.	器種	器形	遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土・色調・焼成	備考
30	土師器	皿	整地層2 (落込28)	14.4	2.8		胎土密、長石・チャート・雲母含む、2.5Y7/3浅黄色、焼成良。	
31	土師器	皿	整地層2 (落込28)	14.2	3.3		胎土密、長石・チャート・雲母・赤色粒含む、10YR8/3浅黄橙色、焼成良。	
32	土師器	皿	整地層2 (集石8)	9.0	1.5		胎土密、長石・石英・赤色粒含む、7.5YR8/3浅黄橙色、焼成良。	
33	土師器	皿	整地層2 (集石8)	9.7	1.7		胎土密、長石・石英・チャート・雲母含む、10YR7/3にぶい黄橙色、焼成良。	
34	土師器	皿	整地層2 (集石8)	9.8	1.6		胎土密、長石・チャート・雲母含む、10YR8/3浅黄橙色、焼成良。	
35	土師器	皿	整地層2 (集石8)	10.1	1.5		胎土密、長石・石英・チャート・雲母・赤色粒含む、10YR7/4にぶい黄橙色、焼成良。	
36	土師器	皿	整地層2 (集石8)	14.6	2.9		胎土密、長石・石英・チャート・雲母・赤色粒含む、10YR8/3浅黄橙色、焼成良。	
37	土師器	皿	整地層2 (集石8)	14.6	3.2		胎土密、長石・石英・雲母・赤色粒含む、10YR7/4にぶい黄橙色、焼成良。	
38	土師器	皿	整地層2 (集石8)	15.2	3.3		胎土密、長石・チャート・雲母・赤色粒含む、10YR7/3にぶい黄橙色、焼成良。	
39	土師器	皿	整地層2 (集石8)	15.5	3.1		胎土密、長石・チャート・雲母・赤色粒含む、2.5Y8/3淡黄色、焼成良。	
40	土師器	皿	整地層2 (集石8)	16.1	3.2		胎土密、長石・石英・チャート・雲母・赤色粒含む、7.5YR7/4にぶい橙色、焼成良。	
41	白色土器	蓋	整地層2 (集石8)		(1.9)		胎土密、長石・チャート・雲母含む、2.5Y8/2灰白色、焼成良。	
42	白色土器	皿	整地層2	8.9	2.9	4.6	胎土密、長石・チャート含む、2.5Y8/2灰白色、焼成良。	
43	白色土器	小型 三足盤	整地層2	9.6	2.1		胎土密、長石・赤色粒含む、10YR8/2灰白色、焼成良。	
44	白色土器	高杯 (脚柱部)	整地層2 (集石8)		(11.7)		胎土密、長石・チャート・雲母含む、2.5Y8/2灰白色、焼成良。	
45	白色土器	高杯 (脚柱部)	整地層2		(12.7)		胎土密、長石・チャート・雲母含む、10YR8/2灰白色、焼成良。	
46	土師質土器	鉢	整地層2 (落込28)	24.8	(6.1)		胎土密、長石・石英・チャート・雲母含む、2.5Y6/3にぶい黄色、焼成良。	
47	土師質土器	小椀	整地層2 (落込28)	7.6	(3.0)		胎土密、長石・石英・チャート・赤色粒含む、7.5YR7/3にぶい橙色、焼成良。	
48	山茶椀	小椀	整地層2	7.9	(2.4)		胎土密、長石・チャート含む、N7/0灰白色、焼成良。	
49	山茶椀	椀	整地層2 (瓦集中6)	14.1	3.7	7.0	胎土密、長石・チャート含む、N7/0灰白色、焼成良。	
50	山茶椀	鉢	整地層2 (集石3)		(4.6)	16.8	胎土密、長石・チャート含む、N7/0灰白色、焼成良。	
51	須恵質陶器	甕	整地層2	26.4	(9.4)		胎土密、N7/0灰白色、焼成良。	勝間田焼
52	白磁	椀	整地層2 (落込28)	14.8	(3.3)		胎土密、長石・チャート含む、N7/0灰白色、釉7.5Y7/2灰白色、焼成良。	
53	白磁	椀	整地層2 (落込28)	6.4	(2.1)		胎土密、チャート含む、N8/0灰色、釉10Y8/1灰白色、焼成良。	
54	白磁	椀	整地層2		2.1	5.6	胎土密、長石含む、5Y7/1灰白色、釉5Y8/2灰白色、焼成良。	
55	土師器	皿	井戸46 (掘形)	9.0	1.1		胎土密、長石・チャート・雲母含む、5Y8/2灰白色、焼成良。	
56	土師器	皿	井戸46 (掘形)	9.4	1.4		胎土密、長石・チャート含む、2.5Y8/2灰白色、焼成良。	
57	土師器	皿	井戸46 (掘形)	10.4	1.9		胎土密、長石・石英・赤色粒含む、10YR8/3浅黄橙色、焼成良。	
58	土師器	皿	井戸46 (掘形)	13.6	2.3		胎土密、長石・チャート・雲母・赤色粒含む、10YR7/3にぶい黄橙色、焼成良。	

No.	器種	器形	遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土・色調・焼成	備考
59	土師器	皿	整地層1	8.7	1.6		胎土密、石英・チャート・雲母含む、2.5Y8/2灰色、焼成良。	
60	土師器	皿	整地層1	9.4	1.6		胎土密、長石・石英・チャート含む、2.5Y8/2灰色、焼成良。	
61	土師器	皿	整地層1	9.3	1.6		胎土密、2.5Y8/2灰白色、焼成良。	
62	土師器	皿	整地層1	9.0	1.3		胎土密、長石・石英・チャート・雲母含む、10YR7/3にぶい黄橙色、焼成良。	
63	土師器	皿	整地層1	9.4	1.7		胎土密、長石・石英・チャート・赤色粒含む、10YR7/2にぶい黄橙色、焼成良。	
64	土師器	皿	整地層1	9.6	(1.7)		胎土密、長石・チャート・雲母含む、2.5Y7/2灰黄色、焼成良。	
65	土師器	皿	整地層1	14.0	2.1		胎土密、長石・石英・チャート・雲母含む、10YR8/3浅黄橙色、焼成良。	
66	土師器	皿	整地層1	12.8	(2.3)		胎土密、長石・チャート・雲母含む、7.5YR7/3にぶい橙色、焼成良。	
67	土師器	皿	整地層1	14.1	3.5		胎土密、長石・チャート・雲母含む、10YR8/3浅黄橙色、焼成良。	
68	山茶椀	小型鉢	整地層1	9.1	2.8	5.1	胎土密、長石・チャート含む、2.5Y7/1灰白色、焼成良。	輪花
69	白磁	椀	整地層1		(3.6)	5.6	胎土密、微粒子含む、N7/0灰白色、釉5Y7/2灰白色、焼成良。	
70	白磁	椀	整地層1		(2.8)	6.9	胎土密、微粒子含む、N8/0灰色、釉7.5Y7/1灰白色、焼成良。	
71	白磁	蓋	整地層1	8.7	3.8		胎土密、微粒子含む、7.5Y8/1灰色、釉5Y7/2灰白色、焼成良。	
72	白磁	壺	整地層1	9.8	(3.5)		胎土密、N8/0灰色、釉7.5Y6/2灰オリーブ色、焼成良。	

付表2 出土その他の遺物観察表

No.	種類	器形	遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土・色調・焼成／成形・調整・特徴
土1	土製品	土製円塔	整地層2		2.1		胎土密、長石・チャート含む、2.5Y8/3淡黄色、釉7.5Y6/3オリーブ黄色、焼成良。
土2	土製品	土製円塔	整地層2 (落込28)	(5.6)	2.0		胎土密、チャート含む、10YR8/3浅黄橙色、釉7.5Y7/3浅黄色、焼成良。
土3	土製品	土製円塔	整地層1		2.1		胎土密、石英・チャート・赤色粒含む、2.5Y8/2灰色、焼成良。
土4	土製品	土製円塔	整地層2 (集石8)	5.7	2.3		胎土密、長石・石英・チャート含む、2.5Y8/3淡黄色、釉7.5Y6/3オリーブ黄色、焼成良。
土5	土製品	土製円塔	整地層2 (集石7)	6.0	1.9		胎土密、長石・チャート・赤色粒含む、2.5Y8/2灰白色、釉5Y6/6オリーブ色、焼成良。
石1	石製品	砥石	整地層1	残存長 8.2	幅 3.5	厚さ 0.9	堆積岩製、使用面と自然面がある。側面・端面は加工。一部欠損する。
木1	木製品	工具	井戸46 (埋土)	長さ 13.1	残存幅 5.8	厚さ 1.4	刷毛状の櫛葉が11残存。持ち手上面は弓なりに加工。上部に穴を穿つ。

付表3 出土瓦観察表

No.	種類	文様	出土遺構	胎土・色調・焼成	成形・調整・特徴	産地	備考
瓦1	軒丸	三巴文	整地層2 (瓦集中6)	胎土密、N7/0灰白色、焼成硬質	巴は右巻き、頭接しない、尾は接する。圏線あり、文様平坦。瓦当部裏面上部に浅い溝をつけ、丸瓦部挿入。瓦当部下面、裏面ナデ。	播磨系	
瓦2	軒丸	三巴文	整地層2	胎土密、N6/0灰色、焼成硬質	巴は右巻き、頭・尾は接しない。珠文は楕円、密。瓦当部下面・裏面・丸瓦凸面ナデ、側面ケズリ。	播磨系	ほぼ完形
瓦3	軒丸	複弁八弁蓮華文	井戸42 (埋土)	胎土密、N4/0灰色、焼成硬質	凸型中房。瓦当部裏面上端に丸瓦部を当て接合。裏面・丸瓦凸面ナデ。	播磨系	林崎三本松窯同文
瓦4	軒丸	単弁十六弁蓮華文	整地層2 (集石3)	胎土密、N3/0暗灰色、焼成硬質	凸中房、蓮子不明確。丸瓦部凸面タテナデ、瓦当部下面・裏面・丸瓦凹面ナデ、瓦当面離れ砂付着。	播磨系	三木、久留美窯同文
瓦5	軒丸	複弁八弁蓮華文	整地層2 (土器集中29)	胎土密、N5/0灰色、焼成良	凹型中房。瓦当部裏面上端に丸瓦部を当て接合。裏面・丸瓦凸面ナデ。	播磨系	林崎三本松窯同文
瓦6	軒丸	複弁八弁蓮華文	整地層2	胎土密、N5/0灰色、焼成良	凸中房、瓦当部裏面上部に浅い溝をつけ丸瓦部を当て接合。裏面・丸瓦凸面ナデ。	播磨系	瓦当面に2箇所 範傷あり
瓦7	軒丸	複弁八弁蓮華文	整地層2	胎土密、N5/0灰色、焼成良	凹型中房、周りに蕊帯が巡る。瓦当周縁ケズリ、瓦当部裏面ナデ。	播磨系	尊勝寺、円勝寺同文、神出窯
瓦8	軒丸	複弁八弁蓮華文	整地層1	胎土密、N4/0灰色、焼成硬質	凹型中房、界線・子葉は2つ盛り上がり、外区に珠文が巡る。瓦当部下・裏面ナデ。	播磨系	尊勝寺、円勝寺同文
瓦9	軒丸	複弁八弁蓮華文	整地層1	胎土密、N3/0暗灰色、焼成やや軟質	凹型中房、弁の輪郭線、子葉あり。外区に珠文が巡る。瓦当部裏面上部に丸瓦部を当て接合。瓦当部裏面、丸瓦凸面ナデ。	山城系	
瓦10	軒丸	単弁八弁蓮華文	整地層2 (集石4)	胎土密、N5/0灰色、焼成良	凹型中房、子葉1つ、棒状の間弁あり。瓦当部裏面上端に丸瓦部を当て接合。瓦当部裏面、丸瓦凸面ナデ。凹面布目。	山城系	
瓦11	軒丸	複弁蓮華文	整地層2 (瓦集中6)	胎土密、2.5Y7/1灰白色、焼成良	凹型中房。瓦当部下・裏面ナデ。	山城系	瓦当面に2箇所 範傷あり
瓦12	軒丸	三巴文	整地層1	胎土やや粗、2.5Y7/2灰黄色、焼成やや軟質	中央に右巻き巴、周縁に鋸歯状文が巡る。瓦当部下・裏面ナデ。	山城系	
瓦13	軒丸	二巴文	整地層2	胎土密、N3/0暗灰色、焼成やや軟質	巴は右巻き、頭接する、尾は接しない。瓦当部裏面上部に丸瓦部を当て接合。瓦当部裏面ナデ。	山城系	
瓦14	軒丸	三巴文	整地層2 (瓦集中6)	胎土密、N6/0灰色、焼成良	巴は左巻き、頭・尾は接しない。横長の楕円形。瓦当部側面は縄目タタキ、裏面指オサエ、丸瓦部凸面は縄目タタキ、凹面布目。	山城系	
瓦15	軒丸	単弁八弁蓮華文	整地層1	胎土砂粒多く含む、N5/0灰色、焼成良	凸型中房、周囲に凸型の蕊帯が巡る。瓦当部裏面上部に浅い溝をつけ丸瓦部を挿入して接合。瓦当部側面ナデ、裏面丁寧なナデ。	備前 備中系	
瓦16	軒丸	単弁八弁蓮華文	整地層1	胎土砂粒多く含む、N5/0灰色、焼成良	凸型中房、周囲に凸型の蕊帯が巡る。瓦当部側面ナデ、裏面丁寧なナデ。	備前 備中系	瓦当面範傷あり
瓦17	軒丸	複弁八弁蓮華文	整地層2 (落込48)	胎土砂粒多く含む、10YR7/3にぶい黄橙色、焼成やや軟質	凸型中房、周囲に凸型の蕊帯が巡る。瓦当部側面ナデ、裏面丁寧なナデ。	備前 備中系	
瓦18	軒平	外行唐草文	整地層2	胎土密、N7/0灰白色、焼成硬質	瓦当部中央に平瓦を当て、上・下に粘土を補足して接合。包込み技法。凸、凹面ナデ。	播磨系	
瓦19	軒平	外行唐草文	整地層2 (集石5)	胎土密、N6/0灰色、焼成良	中心飾りは上向き「C」字、主葉は3転する。瓦当部裏面上部に平瓦部を当て接合。凸面ヨコナデ、凹面、側面タテナデ。	播磨系	
瓦20	軒平	外行唐草文	整地層2 (集石4)	胎土密、N6/0灰色、焼成良	中心飾りから、主葉は3転する。包込み技法。すべてナデ。	播磨系	二次被熱受ける
瓦21	軒平	外行唐草文	整地層2 (瓦集中6)	胎土密、N6/0灰色、焼成良	瓦当部裏面上端に平瓦部を当て接合。包込み技法。すべてナデ。	播磨系	
瓦22	軒平	外行唐草文	整地層2 (瓦集中6)	胎土密、N5/0灰色、焼成良	瓦当部裏面上部に平瓦部を当て接合。包込み技法。すべてナデ。	播磨系	
瓦23	軒平	外行唐草文	土坑43	胎土密、N5/0灰色、焼成良	中心飾りは上向き「C」字、主葉は3転する。瓦当部裏面中心に平瓦部を当て接合、側面・上・下から粘土を付加。包込み技法。凹面に粘土の糸切り痕明瞭、凸面、側面タテナデ。	播磨系	林崎三本松窯同文

No.	種類	文様	出土遺構	胎土・色調・焼成	成形・調整・特徴	産地	備考
瓦24	軒平	外行唐草文	井戸45 (埋土)	胎土密、N6/0灰色、 焼成硬質	中心飾りは半裁華文、主葉は2転する。包込み技法。凹面に粘土の糸切り痕明瞭、凸面、側面タテナデ。	播磨系	
瓦25	軒平	内行唐草文	整地層2 (瓦集中6)	胎土密、N5/0灰色、 焼成硬質	中心飾りは水垂、折曲げ技法。折曲げ後にタタキ。瓦当顎部凸面に縄目タタキ。凸面ヨコナデ、凹面、側面タテナデ。	丹波系	円勝寺同範あり
瓦26	軒平	偏行唐草文	井戸42 (埋土)	胎土密、N4/0灰色、 焼成良	右方向の唐草。折曲げ技法。瓦当面に布目、瓦当顎部凸面に縄目タタキ。	山城系 か	
瓦27	軒平	外行唐草文	整地層2 (瓦集中6)	胎土密、2.5Y6/1黄 灰色、焼成良	垂線を中心に唐草文を両側に2転する。主葉は連続して大きく反転し、支葉は巻き込む。半折曲げ。平瓦部凸面はナデ、側面タテナデ、凹面布目。	山城系	
瓦28	軒平	偏行唐草文	整地層2 (瓦集中6)	胎土密、N6/0灰色、 焼成良	右方向の唐草。折曲げ技法。瓦当顎部凸面に縄目タタキ。裏面指オサエ後、ナデ。平瓦部凸面に布目、凹面に縄目タタキ。	山城系	
瓦29	軒平	外行唐草文	井戸42 (埋土)	胎土やや粗、N4/0 灰色、焼成良	折曲げ技法。瓦当顎部凸面はケズリ、裏面はナデ。曲げ皺が強く残る。	山城系	
瓦30	軒平	内行唐草文	整地層1	胎土密、N4/0灰色、 焼成良	両側から中心に唐草が転回する。外区は珠文が密。瓦当顎部凸面ケズリ、裏面ナデ。平瓦部凹面布目、凸面ナデ。	山城系	
瓦31	軒平	幾何学文	井戸42 (埋土)	胎土密、N5/0灰色、 焼成良	三角形の中に垂線を配する。折曲げ技法。折曲げ後にタタキ。瓦当顎部凸面に縄目タタキ。凸面ヨコナデ、凹面、側面タテナデ。	山城系	
瓦32	軒平	剣頭文	整地層2	胎土密、N5/0灰色、 焼成やや軟質	蓮弁状の剣頭文、陽刻。半折曲げ技法。瓦当顎部凸面ケズリ、平瓦部凸面に布目、凹面ナデ。	山城系	
瓦33	軒平	剣頭文	井戸45 (掘形)	胎土密、10YR8/4 浅黄橙色、焼成良	剣頭文は垂直方向に配し陰刻。折曲げ技法。すべてナデ。	山城系	
瓦34	軒平	剣頭文	整地層1	胎土密、5Y6/1灰色、 焼成やや軟質	剣頭文は垂直方向に配し陰刻。折曲げ技法。平瓦部凹面布目、凸面ナデ。	山城系	
瓦35	軒平	外行唐草文	整地層2 (集石8・ 瓦集中6)	胎土砂粒多く含む、 7.5YR6/6橙色、焼成 やや軟質	唐草文は3転。瓦当部裏面ナデ、平瓦部凸面斜格子目タタキ、凹面布目、側面タテヘラケズリ。瓦当部成形は貼り付けか。	備前 備中系	
瓦36	軒平	外行唐草文	整地層2 (瓦集中6)	胎土砂粒多く含む、 N5/0灰色、焼成良	唐草文は3転。瓦当部裏面ナデ、平瓦部凸面斜格子タタキ、凹面布目、側面タテヘラケズリ。	備前 備中系	
瓦37	軒丸	複弁八弁 蓮華文	井戸46 (埋土)	胎土砂粒多く含む、 N6/0灰色、焼成良	凸型中房、周囲に凸型の蕊帯が巡る。瓦当部裏面上部に浅い溝をつけ丸瓦部を挿入して接合。瓦当部側面ナデ、裏面丁寧なナデ。	備前 備中系	
瓦38	軒丸	複弁八弁 蓮華文	井戸46 (埋土)	胎土砂粒多く含む、 N7/0灰白色、焼成硬 質	凸型中房、周囲に凸型の蕊帯が巡る。接合は不明。瓦当部側面ナデ、裏面丁寧なナデ。平瓦部凸面斜格子タタキ、後タテナデ。凹面布目。	備前 備中系	
瓦39	軒平	外行唐草文	井戸46 (埋土)	胎土砂粒多く含む、 10YR6/4にぶい黄橙 色、焼成やや軟質	唐草文は3転か。文様の上部が切り詰められる。瓦当部裏面ナデ、平瓦部凸面斜格子タタキ、凹面布目、側面タテヘラケズリ。	備前 備中系	平瓦部凸面にヘラ描き文字あり。判読不明
瓦40	軒平	剣頭文	井戸46 (掘形)	胎土密、10YR7/3に ぶい黄橙色、焼成や や軟質	剣頭文は垂直方向に配し陰刻。折曲げ技法。平瓦部凸面にヘラ記号。	山城系	平瓦部凸面にヘラ記号
瓦41	丸瓦		井戸46 (掘形)	胎土砂粒多く含む、 10YR8/3にぶい浅黄 橙色、焼成やや軟質	狭端面に玉縁の痕跡、広端面は未調整。凸面斜格子タタキ、凹面布目、側面タテヘラケズリ。	備前 備中系	
瓦42	丸瓦		井戸46 (掘形)	胎土砂粒多く含む、 7.5YR5/6明褐色、 焼成やや軟質	釘穴あり。凸面斜格子タタキ、凹面布目、側面タテヘラケズリ。	備前 備中系	
瓦43	平瓦		井戸46 (掘形)	胎土砂粒多く含む、 10YR7/4にぶい黄橙 色、焼成やや軟質	狭端面はケズリ、広端面は未調整。凸面斜格子タタキ、凹面布目、側面タテヘラケズリ。	備前 備中系	

圖 版



1 1区第1面（北から）



2 2区第1面（西から）



3 1区東壁（北西から）



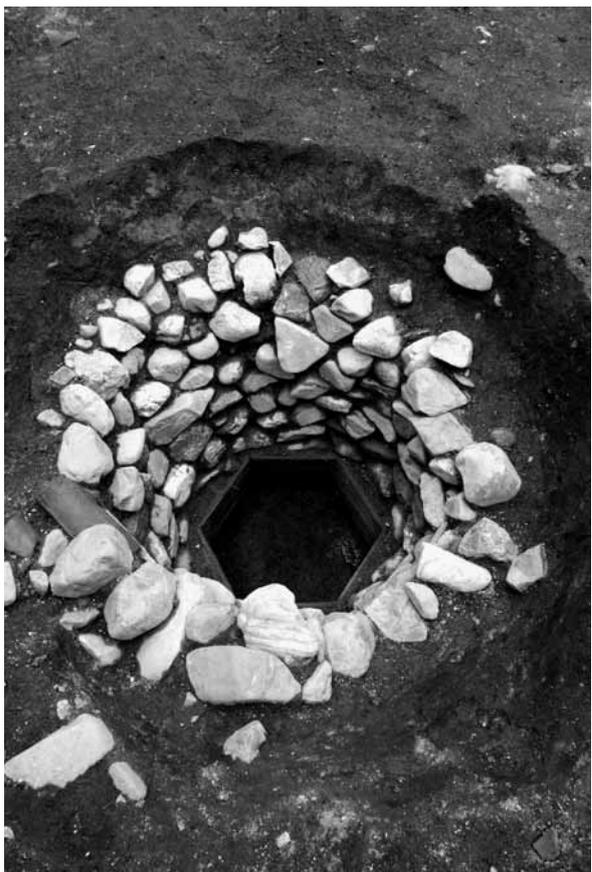
1 1区第2面（北から）



2 2区第2面（東から）



3 2区整地層2検出状況（西から）



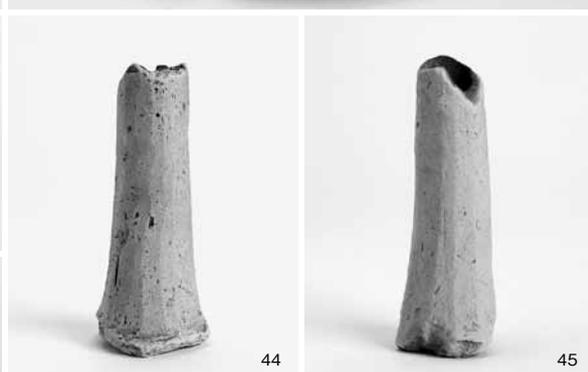
1 井戸42 (北から)

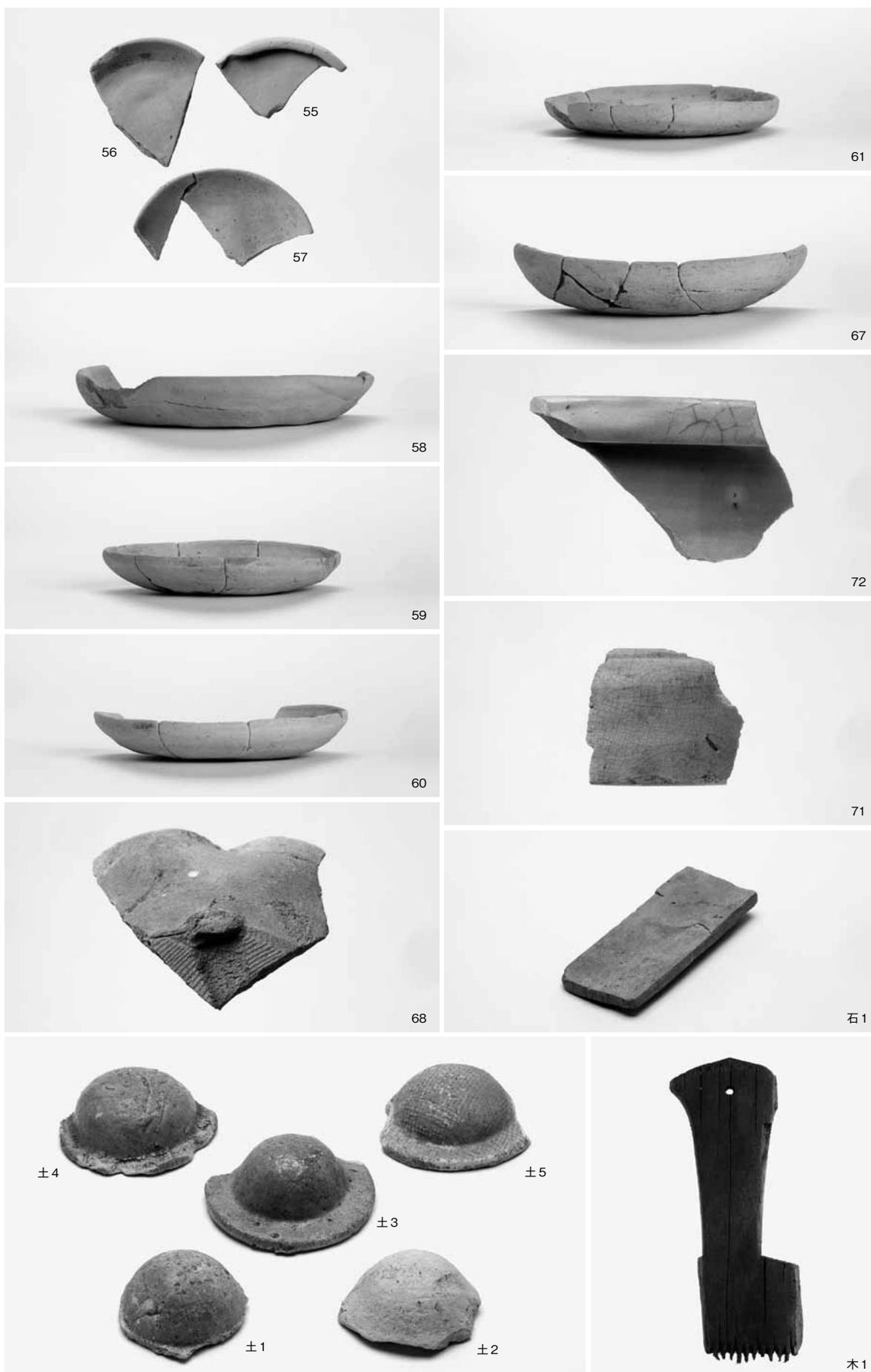


2 井戸45 (東から)



3 井戸46 (南西から)





出土土器・土製品・石製品・木製品



出土瓦 1



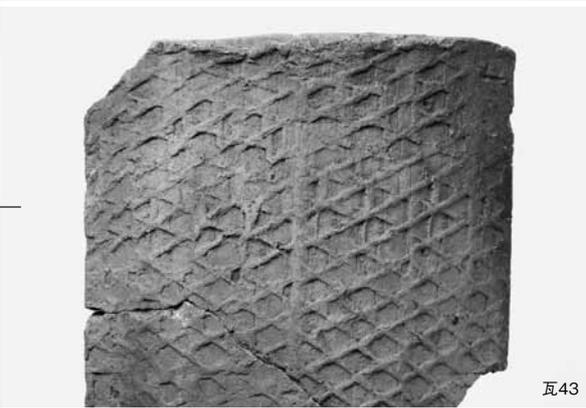
瓦38



瓦39



瓦39



瓦43



瓦41

出土瓦2

報 告 書 抄 録

ふりがな	えんしょうじあと・おかぎいせき							
書名	延勝寺跡・岡崎遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2014-1							
編著者名	近藤章子							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2014年7月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
えんしょうじあと 延勝寺跡 おかぎいせき 岡崎遺跡	きょうとしききょうく 京都市左京区 おかぎせいしょうじちよう 岡崎成勝寺町 3番地の2	26100	417-6 418	35度 00分 47秒	135度 46分 47秒	2014年3月 10日～2014 年5月1日	360㎡	住宅建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
延勝寺跡	寺院跡	弥生時代 ～古墳時代		弥生土器、土師器、須 恵器、石鏃		調査区ほぼ全域で 平安時代後期から 末期の延勝寺造営 に伴う整地層を検 出し、この上面で 石組井戸、木組井 戸などを検出した。		
岡崎遺跡	集落跡	平安時代	井戸、土坑、整地 層	土師器、須恵器、白色 土器、緑釉陶器、灰釉 陶器、黒色土器、瓦器、 山茶椀、土師質土器、 須恵質陶器、焼締陶器、 輸入陶磁器、瓦、土製 円塔、石製品、木製品				
		鎌倉時代 ～室町時代	井戸、土坑、耕作 溝	土師器、瓦器、焼締陶 器、輸入陶磁器、瓦、 埴				
		江戸時代	溝、井戸	土師器、染付、施釉陶 器、焼締陶器、瓦、土 製品、金属製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-1

延勝寺跡・岡崎遺跡

発行日 2014年7月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961